

漢主 秭帰自り將に呉に進撃せんとす。治中従事の黄權 諫めて曰く、「呉人戦に悍し。而して水軍 流れに沿い、進むは易く退くは難し。臣 請ふ、先駆と為りて以て寇に当り、陛下宜しく後鎮と為れ」と。漢主 従はず、權を以て鎮北將軍と為し、江北の諸軍を督せしむ。自ら諸將を率ゐ、江南自り山に縁り嶺を截ち、夷道の猯亭に軍す。呉將 皆之を迎撃せんと欲す。

胡三省…夷道県漢属南郡、呉属宜都郡。卷四十三 **黄權伝**…先主為漢中王、猶領益州牧、以權為治中従事。及称尊号、将東伐呉、權諫曰…「呉人悍戦、又水軍順流、進易退難、臣請為先驅以嘗寇、陛下宜為後鎮。」先主不従、以權為鎮北將軍、督江北軍以防魏師。先主自在江南。及呉將軍陸議乘流断圍、南軍敗績、先主引退。而道隔絶、權不得還、故率將所領降于魏。有司執法、白收權妻子。先主曰…「孤負黄權、權不負孤也。」待之如初。 **先主伝**…二年春正月、先主軍還秭帰。將軍呉班、陳式水軍屯夷陵、夾江東西岸。二月先主自秭帰、率諸將進軍、緣山截嶺、於夷道猯亭、駐營。…鎮北將軍黄權、督江北諸軍、与呉軍相拒於夷陵道。

### 漢人自佷山通武陵、使侍中襄陽馬良以金錦賜五谿諸蠻夷、授以官爵。

漢人 佷山自り武陵に通じ、侍中の襄陽の馬良 金錦を以て五谿の諸蛮夷に賜ひ、官爵を以て授く。

胡三省…佷山県、前漢属武陵郡。呉属宜都郡。 **先主伝**…自佷山通武陵、遣侍中馬良、安慰五谿蠻夷、咸相率響應。卷二十九 **馬良伝**…先主称尊号、以良為侍中。及東征呉、遣良入武陵招納五谿蠻夷。蠻夷渠帥皆受印号、咸如意指。会先主敗績於夷陵、良亦遇害。先主拜良子秉、為騎都尉。

### ■黄初三年二月

三月乙丑、立皇子齐公叡為平原王、皇弟鄢陵公彰等皆進爵為王。甲戌、

### 以為益也。

法既に峻切にして、諸侯王の過惡 日々聞ゆ。独り北海王の亮 謹慎にして学を好み、未だ嘗て失有らず。文学・防輔 相ひ与(とも)に言ひて曰く、「詔を受けて王の举措を察す。過有れば当に奏すべしと。善有るに及び亦 宜しく以て聞すべし」と。遂に共に表して亮の美なるを称陳す。亮之を聞き、大いに驚懼し、文学を責讓して曰く、「修身して自守するは、常人の行ひのみ。而るに諸君 乃ち以て上聞す。是れ適(まさ)に其の負累を増す所以なり。且つ如し善有れば、何をか不聞を患はん。而るに遽りて共に是の如し。是れ益と為る所以に非ず」と。

胡三省…『晋百官志』…王国置師友、文学各一人。防輔不書者、魏氏防制藩国過差、晋武帝懲其失而不置也。／衰之言、漢北海王睦之故智也。

**中山恭王褒伝**…少好学、年十餘歲能属文。每讀書、文学左右常恐以精力為病、数諫止之、然性所樂、不能廢也。二十二年、徙封東郷侯、其年又改封贊侯。黄初二年、進爵為公、官属皆賀、褒曰…「夫生深宮之中、不知稼穡之艱難、多驕逸之失。諸賢既慶其休、宜輔其闕。」每兄弟游娛、褒独覃思經典。文学防輔相与言曰…「受詔察公举措、有過当奏、及有善、亦宜以聞、不可匿其美也。」遂共表称陳褒美。褒聞之、大驚懼、責讓文学曰…「脩身自守、常人之行耳、而諸君乃以上聞、是適所以增其負累也。且如有善、何患不聞、而遽共如是、是非益我者。」其戒慎如此。三年、為北海王。其年、黄龍見鄴西 漳水、褒上書贊頌。詔賜黄金十斤、詔曰…「昔唐叔帰禾、東平献頌、斯皆骨肉贊美、以彰懿親。王研精墳典、耽味道真、文雅煥炳、朕甚嘉之。王其克慎明德、以終令聞。」四年、改封贊王。七年、徙封濮陽。

### 癸亥、帝還許昌。(文帝紀による)

### ■黄初三年五月

立皇子霖為河東王。甲午、帝行如襄邑。(文帝紀による)

三月乙丑、皇子たる齊公の叡を立てて平原王と為す。皇弟たる鄢陵公の彰等 皆爵を進めて王と為る。甲戌、皇子の霖を立てて河東王と為す。甲午、帝行して襄邑に如く。

### ■黄初三年四月

夏、四月、戊申、立鄆城侯植為鄆城王。(文帝紀による)

是時、諸侯王皆寄地空名而無其実。王国各有老兵百餘人以為守衛。隔絶千里之外、不聽朝聘、為設防輔監国之官以伺察之。雖有王侯之号而儕於匹夫、皆思為布衣而不能得。

是の時、諸侯王 皆地に寄りて名を空しくして其の実無し。王国 各々老兵百余人有るを以て守衛と為す。隔絶すること千里の外、朝聘を聴かず、為に防輔・監国の官を設けて以て之を伺察す。王侯の号有ると雖も而るに匹夫に儕(ひと)しく、皆布衣(た)らんを思へども得ること能はず。

胡三省…防輔者、言防其為非而輔之以正也。監国、即監国謁者也。 **卷二十一** 注引『袁子』…魏興、承大乱之後、民人損減、不可則以古始。於是封建侯王、皆使寄地、空名而無其実。王国使有老兵 百餘人、以衛其国。雖有王侯之号、而乃儕為匹夫。県隔千里之外、無朝聘之儀、鄰国無会同之制。諸侯游獵不得過三十里、又為設防輔監国之官以伺察之。王侯皆思為布衣而不能得。既違宗国藩屏之義、又虧親戚骨肉之恩。

法既峻切、諸侯王過惡日聞。独北海王褒 謹慎好学、未嘗有失。文学、防輔相与言曰、受詔察王举措、有過当奏、及有善亦宜以聞。遂共表称陳褒美。褒聞之、大驚懼、責讓文学曰、修身自守、常人之行耳、而諸君乃以上聞、是適所以增其負累也。且如有善、何患不聞、而遽共如是、是非所

五月、以江南八郡為荊州、江北諸郡為郢州。(文帝紀による)

胡三省…既以孫權為荊州牧、統江南八郡、故以江北諸郡置郢州、呉自立則郢州廢矣。

漢人自巫峽建平連營至夷陵界、立數十屯、以馮習為大督、張南為前部督、自正月与吳相拒、至六月不決。漢主遣吳班將数千人於平地立營、吳將帥皆欲擊之、陸遜曰、此必有譎、且觀之。漢主知其計不行、乃引伏兵八千從谷中出。

漢人 巫峽・建平自り連營して夷陵の界に至るまで、数十屯を立て、馮習を以て大督と為し、張南を前部督と為し、正月自り呉と相拒し、六月に至るまで決せず。漢主 呉班を遣りて数千人を將ゐしめ地を平とし營を立て、呉の將帥 皆之を撃たんと撃す。陸遜曰く、「此れ必ず譎有り。且に之を觀よ」と。漢主 其の計の行はざるを知り、乃ち伏兵八千を引きて谷中より出づ。

**陸遜伝**…黄武元年、劉備率大衆来向西界、權命遜為大都督、假節、督朱然、潘璋、宋謙、韓当、徐盛、鮮于丹、孫桓等五萬人拒之。備從巫峽、建平連圍至夷陵界、立数十屯、以金錦爵賞誘動 諸夷、使將軍馮習為大督、張南為前部、輔匡、趙融、廖淳、傅彤等各為別督、先遣呉班將数 千人於平地立營、欲以挑戰。諸將皆欲擊之、遜曰…「此必有譎、且觀之。」備知其計不可、乃引伏兵八千、從谷中出。

### ■黄初三年閏月

閏月、遜將進攻漢軍、乃先攻一營、不利、諸將皆曰、空殺兵耳。遜曰、吾已曉破之之術。乃敕各持一把茅、以火攻、拔之。一爾勢成、通率諸軍、同時俱攻、斬張南、馮習及胡王沙摩柯等首、破其四十餘營。漢將杜路、劉寧等窮逼請降。

閏月、遜將に漢軍に進攻せんとす。乃ち先に一營を攻め、利あらず、諸將皆曰く、「空

しく兵を殺すのみ」と。遜曰く、「吾已に之を破るの術を曉る」と。乃ち救して各々一把の茅を持せしめ、以て火攻し、之を抜く。一爾勢成り、諸軍を通率し、時を同じくして俱に攻め、張南・馮習及び胡王の沙摩柯らの首を斬り、其の四十余營を破る。漢將路を杜し、劉寧等窮逼して降を請ふ。（陸遜伝による）

**漢主升馬鞍山、陳兵自繞、遜督促諸軍、四面蹙之、土崩瓦解、死者萬數。**

**漢主夜遁、馱人自擔燒鑊鎧斷後、僅得入白帝城、其舟船、器械、水、步軍資、一時略尽、屍骸塞江而下。將軍義陽傅彤為後殿。**

漢主馬鞍山に升り、陳兵自繞す。遜諸軍に督促し、四面之を蹙ぎ、土崩瓦解し、死者万を數ふ。漢主夜に遁げ、馱人自ら鑊鎧を担ぎて燒きて後を断ち、僅かに白帝城に入るを得たり。其の舟船・器械、水・歩の軍資、一時に略ぼ尽き、屍骸江を塞ぎて下る。將軍たる義陽の傅彤後殿と為る。

胡三省：漢主初連兵入夷陵界、沿路置馱、以達於白帝。及兵敗、諸軍潰散、惟馱人自擔所乘鑊鎧、燒之於隘以断後、僅得脱也。據『水経註』：燒鎧断道處、地名石門、在秭帰県西。杜佑曰：帰州巴東県有石門山、劉備断道處。『周礼』、以金鑊止鼓。軍中所用也。／魏文帝分南陽郡立義陽郡、又立義陽県属焉。此在彤入蜀之後、史追書也。

**先主伝**：夏六月黄氣見自秭帰十餘里中、廣數十丈。後十餘日、陸議大破先主軍於猊亭、將軍馮習、張南等皆没。先主、自猊亭還秭帰、收合離散兵、遂棄船舫、由步道還魚復。改魚復県、曰永安。吳遣將軍李異劉阿等、踵躡先主軍、屯駐南山。

**陸遜伝**：備升馬鞍山、陳兵自繞。遜督促諸軍四面蹙之、土崩瓦解、死者萬數。備因夜遁、馱人自擔、燒鑊鎧断後、僅得入白帝城。其舟船器械、水歩軍資、一時略尽、尸骸漂流、塞江而下。備大慚恚、曰：「吾乃為遜所折辱、豈非天邪。」

**初、遜為大都督、諸將或討逆時旧將、或公室貴戚、各自矜、不相聽從。**

■黄初三年七月■

秋、七月、冀州大蝗、飢。（文帝紀による）

■黄初三年八月■

**漢主既敗走、黄権在江北、道絶、不得還、八月、率其衆來降。漢有司請收権妻子、漢主曰、孤負黄権、権不負孤也。待之如初。**

漢主既に敗走し、黄権江北に在りて、道絶ち、還るを得ず。八月、其の衆を率ゐて來降す。漢の有司権の妻子を收めんと請ふ。漢主曰く、「孤黄権に負く。権孤に負かず」と。之を待すること初の如し。

**文帝紀**：八月蜀大将黄権率衆降。**黄権伝**：及呉將軍陸議乘流断圍、南軍敗績、先主引退。而道隔絶、権不得還、故率將所領降于魏。有司執法、白收権妻子。先主曰：「孤負黄権、権不負孤也。」待之如初。

帝謂権曰、君捨逆效順、欲追蹤陳、韓邪。対曰、臣過受劉主殊遇、降吳不可、還蜀無路、是以帰命。且敗軍之將、免死為幸、何古人之可慕也。帝善之、拜為鎮南將軍、封育陽侯、加侍中、使陪乘。漢降人或雲漢誅権妻子、帝詔権発喪。権曰、臣与劉、葛推誠相信、明臣本志。竊疑未実、請須。後得審問、果如所言。

帝権に謂ひて曰く、「君逆を捨てて順に效ふ。陳・韓を追蹤せんと欲するや」と。対へて曰く、「臣劉主より殊遇を過受す。呉に降るは不可なり。蜀に還るに路無し。是を以て帰命す。且つ敗軍の將、死を免るるを幸と為す。何ぞ古人の慕ふ可きことなるか」と。帝之を善しとし、拜して鎮南將軍を為し、育陽侯に封じ、侍中を加へ、陪乗せしむ。漢の降人或ひと云はく漢権の妻子を誅すと。帝権に発喪せよと詔す。権曰く、「臣と劉・葛

**加遜輔国將軍、領荊州牧、改封江陵侯。**（陸遜伝による）

初め、遜大都督と為れども、諸將或ひと討逆する時の旧將なり、或ひと公室の貴戚なり、各々自矜して、相ひ聽從せず。遜に輔国將軍を加へ、荊州牧を領せしめ、江陵侯に改封す。

胡三省：高爵厚祿、受恩多矣。総兵扞敵、受任重矣。皆当有以上報。／『晋職官志』：輔国大將軍、位從公、其号蓋始於漢献帝以命伏完、然猶未加大。

**漢主在白帝、徐盛、潘璋、宋謙等各競表言、備必可禽、乞復攻之。吳王以問陸遜。遜与硃然、駱統上言曰、曹丕大合士衆、外托助国討備、内実有好心、謹決計輒還。**

漢主白帝に在り。徐盛・潘璋・宋謙等各々競ひて表して言く、「備必ず禽ふ可し。復た之を攻むることを乞ふ」と。呉王以て陸遜に問ふ。遜朱然・駱統と上言して曰く、「曹丕士衆を大合し、外は国を助けて備を討つに托するも、内は実には奸心有り。謹みて計を決して輒ち還れ」と。

**陸遜伝**：又備既住白帝、徐盛、潘璋、宋謙等各競表言備必可禽、乞復攻之。権以問遜、遜与朱然、駱統以為曹丕大合士衆、外託助国討備、内実有姦心、謹決計輒還。無幾、魏軍果出、三方受敵也。

**初、帝聞漢兵樹柵連營七百餘里、謂群臣曰、備不曉兵、豈有七百里營可以拒敵者乎。苞原隰險阻而為軍者為敵所禽、此兵忌也。孫権上事今至矣。後七日、呉破漢書到。**

初め、帝漢兵の柵を樹て營を連ぬること七百余里なるを聞き、群臣に謂ひて曰く、「備兵に曉ならず。豈に七百里の營有りて以て敵を拒ぐ可きか。『原隰・險阻を苞みて軍を為す者は敵の禽とする所と為る』と。此れ兵の忌なり。孫権の上事今に至らん」と。後七日、呉漢を破るの書到る。（文帝紀による）

誠に相信を推し、臣の本志を明らかにす。竊かに未だ実ならざるを疑ふ。須つことを請ふ」と。後に審問を得て、果して言ふ所の如し。

胡三省：陳、韓謂韓信、陳平去楚帰漢。／（育陽侯）自此以後、皆名号侯、不復註其国邑。其地名難知者、猶為之註。陪乘、猶駢乗也。

卷四十三**黄権伝**：魏文帝謂権曰：「君捨逆效順、欲追蹤陳、韓邪。」権対曰：「臣過受劉主殊遇、降吳不可、還蜀無路、是以帰命。且敗軍之將、免死為幸、何古人之可慕也。」文帝善之、拜為鎮南將軍、封育陽侯、加侍中、使之陪乘。蜀降人或云誅権妻子、権知其虚言、未便発喪、後得審問、果如所言。及先主薨問至、魏羣臣咸賀而権独否。文帝察権有局量、欲試驚之、遣左右詔権、未至之間、累催相属、馬使奔馳、交錯於道、官属侍從莫不碎魄、而権举止顔色自若。後領益州刺史、徙占河南。大將軍司馬宣王深器之、問権曰：「蜀中有卿輩幾人。」権笑而答曰：「不図明公見顧之重也。」宣王与諸葛亮書曰：「黄公衡、快士也、每坐起歎述足下、不去口実。」景初三年、蜀延熙二年、権遷車騎將軍、儀同三司。明年卒、諡曰景侯。

卷四十三**黄権伝**注引『漢晋春秋』：文帝詔令発喪、権答曰：「臣与劉、葛推誠相信、明臣本志。疑惑未実、請須後問。」

■黄初三年九月■

九月甲午、詔曰、夫婦人与政、乱之本也。自今以後、群臣不得奏事太后、後族之家不得当輔政之任、又不得横受茅土之爵。以此詔伝之後世、若有背違、天下共誅之。（文帝紀による）

九月甲午、詔して曰く、「夫れ婦人の政を与るや、乱の本なり。自今より以後、群臣太后に奏事するを得ず。後族の家輔政の任に当たるを得ず。又横ままに茅土の爵を受けるを得ず。此の詔を以て之を後世に伝へよ。若し背違する有れば、天下共に之を誅せ」と。

卞太后每見外親、不假以顏色、常言、居處當節儉、不当望賞、念自佚也。外捨当怪吾遇之太薄、吾自有常度故也。吾事武帝四・五十年、行儉日久、不能自變為奢。有犯科禁者、吾且能加罪一等耳、莫望錢米恩貸也。

胡三省…后妃謂其外家為「外舍」。言罪加於常人犯法者「一等」也。

卞太后 毎に外親と見ひ、顔色を以て仮らず、常に言ふ。「居処 当に節儉すべし。当に望賞すべからず。自ら佚するを念ず。外舍 当に吾之を遇すること太だ薄きを怪しむべきは、吾自ら常度有る故なり。吾武帝に事ふること四・五十年、行の儉たるは日に久しく、自ら変じて奢を為す能はず。科禁を犯す者有れば、吾且に能く罪一等を加ふるのみ。錢米を望み恩貸する莫れ」と。

后妃 **下后伝** 注引『魏書』…太后每隨軍征行、見高年白首、輒住車呼問、賜与絹帛、对之涕泣曰…「恨父母不及我時也。」太后每見 外親、不假以顏色、常言「居處当務節儉、不当望賞賜、念自佚也。外舍当怪吾遇之太薄、吾自有常度故也。吾事 武帝四五十一年、行儉日久、不能自變為奢、有犯科禁者、吾且能加罪一等耳、莫望錢米恩貸也。」帝為太后弟秉起第、第成、太后幸第請諸家外親、設下廚、無異膳。太后左右、菜食粟飯、無魚肉。其儉如此。

帝將立郭貴嬪為後、中郎棧潛上疏曰、夫后妃之德、盛衰治乱所由生也。是以聖哲慎立元妃、必取先代世族之家、擇其令淑、以統六宮、虔奉宗廟。易曰、家道正而天下定。由内及外、先王之令典也。春秋書宗人鬻夏云、無以妾為夫人之礼。齊桓誓命於葵丘、亦曰、無以妾為妻。令後宮嬖寵、常亞乘輿、若因愛登後、使賤人暴貴、臣恐後世下陵上替、開張非度、乱自上起。帝不從。庚子、立皇后郭氏。

帝將に郭貴嬪を立てて后と為さんとす。中郎の棧潜 上疏して曰く、「夫れ后妃の徳、盛衰・治乱 由りて生ずる所なり。是を以て聖哲 慎みて元妃を立て、必ず先代の世族なるの初め、吳王 于禁、護軍の浩周、軍司馬の東里袞に遣はして帝を詣でしめ、自ら誠款を陳べしむ。辞 甚だ恭慤たり。帝 周等に問ひて問く、「権 信ず可きか」と。周 以為へらく権 必ず臣服すと。而るに袞 其の必ず服す可からざるを謂ふ。帝 周の言を悦び、以為へらく以て之を知ること有りて、故に立てて吳王と為し、復た周をして吳に至らしむ。周 吳王に謂ひて曰く、「陛下 未だ王を信ぜず子を入侍せしむ。周 闔門の百口を以て之を明らかになす」と。吳王 之の為に流涕・沾襟し、天を指して誓ひを為す。周 還れども侍子に至らず、但だ多く虚辞を設く。

呉主伝 注引『魏略』…初東里袞為于禁軍司馬、前与周俱沒、又俱還到、有詔皆見之。帝問周等、周以為権必臣服、而東里袞謂其不可必服。帝悅周言、以為有以知之。是歲冬、魏王受漢禪、遣使以権為吳王、詔使周与使者俱往。周既致詔命、時与権私宴、謂権曰「陛下未信王遣子入侍也、周以闔門百口明之。」権因字謂周曰「浩孔異、卿乃以挙家百口保我、我当何言邪。」遂流涕沾襟。及与周別、又指天為誓。周還之後、権不遣子而設辞、帝乃久留其使。

帝欲遣侍中辛毗、尚書桓階往与盟誓、並責任子、吳王辞讓不受。帝怒、欲伐之、劉曄曰、彼新得志、上下齐心、而阻帶江湖、不可倉卒制也。」帝不從。

帝侍中の辛毗、尚書の桓階を遣はして往きて与(とも)に盟誓せしめんと欲す。並びに任子のことを責む。吳王 辞讓して受けず。帝 怒りて、之を伐たんと欲す。劉曄曰く、「彼新たに志を得て、上下 心を齊しくす。而して江湖もて阻帶し、倉卒に制す可からず」と。帝 従はず。

呉主伝…初権外託事魏、而誠心不款。魏乃遣侍中辛毗、尚書桓階往与盟誓、并徵任

家より取り、其の令淑なるを扱ひ、以て六宮を統べしめ、宗廟を虔奉す。『易』に曰く、『家道正にして、天下 定まる』と。内由り外に及ぶまで、先王の令典なり。『春秋』に宗人鬻夏を書して云く、『妾を以て夫人の礼を為すこと無し』と。齊桓 葵丘に誓命し、亦た曰く、『妾を以て妻と為すこと無し』と。後宮の嬖寵をして、常に乘輿に亞がしめ、若し愛に因りて后に登れば、賤人をして貴に暴しむるなり。臣 後世の下陵・上替を恐れ、非度を開張し、乱して自ら上起す」と。帝 従はず。庚子、皇后の郭氏を立つ。

胡三省…漢三署中郎及虎賁、羽林中郎、皆秩比六百石。魏文帝自五官中郎將登極、省五官將、惟左・右中郎及虎賁、羽林中郎。棧潜、任城人也。蓋自潜始著。胡三省…『易・家人』曰…夫夫婦婦而家道正、家道正而天下定矣。／賈公彦曰…襄二十四年、公子荊之母嬖、將以為夫人、使宗人鬻夏獻其立夫人之礼。对曰…「無之。」公怒曰…「汝為宗司、立夫人、国之大礼也、何故無之。」对曰…「周公、武公娶於薛、孝公、惠公娶於商、自桓以下娶於齊、此礼也則有。若以妾為夫人、則固無其礼也。」公卒立之。／「無以妾為妻」は、見『孟子』。文帝紀…(黄初三年九月) 庚子、立皇后郭氏。后妃 郭后伝…黄初三年、将登后位。文帝欲立為后、中郎棧潛上疏曰「在昔帝王之治天下、不惟外輔亦有内助。治乱所由、盛衰從之。故西陵配黄、英娥降媯、並以賢明流芳上世。桀奔南巢、禍階末喜。紂以炮烙、怡悅妲己。是以、聖哲慎立元妃、必取先代世族之家擇其令淑、以統六宮虔奉宗廟陰教事修。易曰『家道正而天下定』由内及外、先王之令典也。春秋書『宗人鬻夏云、無以妾為夫人之礼』。齊桓、誓命于葵丘、亦曰『無以妾為妻』。今、後宮嬖寵、常亞乘輿。若因愛登后使賤人暴貴、臣恐、後世下陵上替開張非度、乱自上起也」文帝不從、遂立為皇后。

初、吳王遣于禁護軍浩周、軍司馬東里袞詣帝、自陳誠款、辞甚恭慤。帝問周等、権可信乎。周以為権必臣服、而袞謂其不可必服。帝悅周言、以為有以知之、故立為吳王、復使周至吳。周謂吳王曰、陛下未信王遣子入

子、権辞讓 不受。卷十四 劉曄伝…備軍敗退、吳礼敬軼廢。帝欲興衆伐之、曄以為「彼新得志、上下齐心。而阻帶江湖、必難倉卒」帝不聽。

九月、命征東大將軍曹休、前將軍張遼、鎮東將軍臧霸出洞口、大將軍曹仁出濡須、上軍大將軍曹真、征南大將軍夏侯尚、左將軍張郃、右將軍徐晃圍南郡。吳建威將軍呂範督五軍、以舟軍拒休等、左將軍諸葛瑾、平北將軍潘璋、將軍楊粲救南郡、裨將軍朱桓以濡須督拒曹仁。

九月、征東大將軍の曹休、前將軍の張遼、鎮東將軍の臧霸に命じて洞口を出でしむ。大將軍の曹仁 濡須を出づ。上軍大將軍の曹真、征南大將軍の夏侯尚、左將軍の張郃、右將軍の徐晃 南郡を囲む。吳の建威將軍の呂範 五軍を督し、舟軍を以て休等を拒む。左將軍の諸葛瑾、平北將軍の潘璋、將軍の楊粲 南郡を救ふ。裨將軍の朱桓 濡須の督たるを以て曹仁を拒む。

胡三省…據『張遼伝』、帝遣遼与曹休至海陵、臨江与諸將破呂範。又據『賀齊伝』、齊督扶州以上至皖。黄武初、魏使曹休來伐、齊住新市、会洞口諸軍遭風流溺、頼齊未濟、諸將倚以為勢、休等憚之、遂引軍還。又據『王凌伝』、遼等至廣陵臨江。蓋廣陵即海陵也。蕭子顯曰…南兖州刺史每以秋月出海陵觀濤。与京口对岸。又據『晋書・譙王尚之伝』、桓玄攻尚之於歷陽、使馮該断洞浦、焚舟艦。則洞口在歷陽江邊明矣。

呉主伝…秋九月、魏乃命曹休、張遼、臧霸、出洞口。曹仁、出濡須。曹真、夏侯尚、張郃、徐晃、圍南郡。権、遣呂範等督五軍、以舟軍拒休等。諸葛瑾、潘璋、楊粲、救南郡。朱桓、以濡須督拒仁。時、揚越蠻夷多未平集…。

卷九 夏侯尚伝…黄初三年車駕幸宛。使尚率諸軍、与曹真共圍江陵。権將諸葛瑾、与尚軍对江。瑾渡入江中渚、而分水軍于江中。尚、夜多持油船、将步騎萬餘人。於下流潛渡、攻瑾諸軍、夾江燒其舟船、水陸並攻破之。城未拔、会大疫、詔敕尚引諸軍還。益封六百戸、并前千九百戸、假鉞、進為牧。荊州殘荒、外接蠻夷、而与吳阻漢

水為境、旧民多居江南。尚、自上庸通道。西行七百餘里、山民蠻夷多服從者、五六年間、降附數千家。五年徙封昌陵鄉侯。

## ■黄初三年十月■

冬、十月、甲子、表首陽山東為寿陵、作終制、務從儉薄、不藏金玉、一用瓦器。令以此詔藏之宗廟、副在尚書、秘書、三府。

冬十月甲子、表して首陽山の東に寿陵を為り、終制を作す。務從は儉薄たり。金玉を藏せず、一に瓦器を用ゐる。此の詔を以て之を宗廟に藏し、副は在尚書・秘書・三府に在らしめよ。(文帝紀による)

胡三省…首陽山在洛陽東北。／其副本在尚書及秘書及三公府也。前「藏」字因旧史、後「藏」字用今字。

吳王以揚越蠻夷多未平集、乃卑辞上書、求自改厲。「若罪在難除、必不見置、当奉還土地民人、寄命交州以終餘年。」

吳王揚越の蛮夷多く未だ平集せざるを以て、乃ち辞を卑くして上書し、自ら改めて厲むことを求む。「若し罪の除き難き在れば、必ず置かれず。当に土地・民人を奉還し、交州に寄命して以て余の年を終へん」と。

**【吳主伝】**…時、揚越蠻夷多未平集、内難未弭。故、**權卑辞上書、求自改厲**。「若罪在難除、必不見置、当奉還土地民人、**乞寄命交州以終餘年**」文帝報曰「君生於擾攘之際、本有從横之志、降身奉国、以享茲祚。自君策名已来、貢獻盈路、討備之功、国朝仰成。埋而掘之、古人之所恥。朕之与君、大義已定、豈樂勞師遠臨江漢。廊廟之議、王者所不得專。三公上君過失、皆有本末。朕以不明、雖有曾母投杼之疑、猶冀言者不信以為国福。故、先遣使者犒勞、又遣尚書侍中、踐脩前言以定任子。君遂設辞、不欲使進、議者怪之。又前、都尉浩周勸君遣子。乃実、朝臣交謀以此卜君。君果有不欲使進、議者怪之。又前、都尉浩周勸君遣子。乃実、朝臣交謀以此卜君。君果有

に臨むを樂まんか。若し登身ら朝到すれば、夕に兵を召して還さん」と。是に於て吳王黄武と改元し、江に臨みて拒守す。

**【吳主伝】**…即日下詔、敕諸軍但深溝高壘不得妄進。若君必效忠節以解疑議、**登身朝到夕召兵還**。此言之誠、有如大江」權、遂改年、臨江拒守。

## ■黄初三年十一月■

帝自許昌南征、復郢州為荊州。十一月、辛丑、帝如宛。

帝許昌自り南征し、郢州を復して荊州と為す。十一月辛丑、帝宛に如く。(文帝紀) 胡三省…是年二月置郢州、吳畔、復為荊州。

曹休在洞口、自陳、願將銳卒虎步江南、因敵取資、事必克捷、若其無臣、不須為念。帝恐休便渡江、馭馬止之。侍中董昭侍側、曰、竊見陛下有憂色、独以休濟江故乎。今者渡江、人情所難、就休有此志、勢不独行、当須諸將。臧霸等既富且貴、無復他望、但欲終其天年、保守祿祚而已、何肯乘危自投死地以求微倖。苟霸等不進、休意自沮。臣恐陛下雖有救渡之詔、猶必沉吟、未便從命也。頃之、会暴風吹吳呂範等船、縋纜悉断、直詣休等營下、斬首獲生以千數、吳兵迸散。帝聞之、敕諸軍促渡。軍未時進、吳救船遂至、收軍還江南。曹休使臧霸追之、不利、將軍尹盧戰死。

曹休 洞口に在り、自陳す、「願はくは銳卒を將ゐて江南を虎歩せんことを。敵に因りて資を取れば、事必ず克捷す。若し其れ臣無くんば、須らく為に念ずべからず」と。帝休の便ち渡江するを恐れ、馭馬之を止む。侍中の董昭側に侍り、曰く、「竊かに見る、陛下に憂色有るは、独り休の江を濟る故を以てや。今者 渡江すれば、人情難とする所なり。就て休 此の志有れば、勢独り行かず。当に諸將を須つべし。臧霸等 既に富みて且つ貴く、復た他望無し。但だ其の天年を終へ、祿祚を保守せんと欲するのみ。何ぞ危に乗じて

辞、外引隗囂遣子不終、内喻竇融守忠而已。世殊時異、人各有心、浩周之還、口陳指麾、益令議者發明衆嫌。終始之本、無所據仗、故遂俛仰從羣臣議。今省上事、款誠深至、心用慨然、悽愴動容。即日下詔……

又与浩周書云…「欲為子登求昏宗室。」又云…「以登年弱、欲遣孫長緒、張子布隨登俱来。」

又浩周に書を与へて云く、「子の登の為に宗室に昏を求めんと欲す」と。又云く、「登の年弱なるを以て、孫長緒・張子布を遣はして登に隨ひて俱に來たらしめんと欲す」と。

胡三省…孫邵、字長緒、吳王称尊号、以邵為丞相。

**【吳主伝】**注引『魏略』…又曰「今子当入侍、而未有耦、昔君念之、以為可上連綴宗室若夏侯氏、雖中間自棄、常奉戡在心。当垂宿念、為之先後、使獲攀龍附驥、永自固定。其為分惠、豈有量哉。如是欲遣孫長緒与小兒俱入、奉行礼聘、成之在君。」又曰「小兒年弱、加教訓不足、念当与別、為之緬然、父子恩情、豈有已邪。又欲遣張子布追輔護之。孤性無餘、凡所欲為、今尽宣露。惟恐赤心不先暢達、是以具為君說之、宜明所以。」於是詔曰「權前对浩周、自陳不敢自遠、樂委質長為外臣、又前後辞旨、頭尾擊地、此鼠子自知不能保爾許地也。又今与周書、請以十二月遣子、復欲遣孫長緒、張子布隨子俱来、彼二人皆權股肱心腹也。又欲為子於京師求婦、此權無異心之明效也。」帝既信權甘言、且謂周為得其真、而權但華偽、竟無遣子意。自是之後、帝既彰權罪、周亦見疎遠、終身不用。

帝報曰、朕之与君、大義已定、豈樂勞師遠臨江、漢。若登身朝到、夕召兵還耳。於是吳王改元黄武、臨江拒守。

帝報めて曰く、「朕の君と与にするや、大義 已に定まる。豈に師を勞し遠く江・漢自ら死地に投じ、以て微倖を求むるを肯んずるや。苟くも霸等 進まざれば、休の意自ら沮まる。臣陛下 救渡の詔有りとも雖も、猶ほ必ず沉吟し、未だ便ち命に従はざるを恐るなり」と。之の頃、会々暴風吹く。吳の呂範等の船、縋纜悉く断ち、直ちに休等の營下に詣る。斬首・獲生すること千數を以てし、吳兵 迸散す。帝之を聞き、諸軍に敕して渡るを促す。軍未だ時に進まず、吳の救船 遂に至り、軍を收めて江南に還る。曹休 臧霸をして之を追はしむるも、利せず。將軍の尹盧 戦死す。

胡三省…皆索也、所以維舟者也。卷十四**董昭伝**…文帝即王位、拜昭将作大匠。及踐阼、遷大鴻臚、進封右鄉侯。二年、分邑百戸、賜昭弟訪爵關内侯、徙昭為侍中。三年、征東大將軍曹休臨江在洞浦口、自表「願將銳卒虎步江南。因敵取資、事必克捷。若其無臣、不須為念」帝恐休便渡江、馭馬詔止。時昭侍側、因曰「竊見陛下有憂色、独以休濟江故乎。今者渡江、人情所難。就休有此志、勢不独行、当須諸將。臧霸等既富且貴、無復他望。但欲終其天年、保守祿祚而已。何肯乘危自投死地以求微倖。苟霸等不進、休意自沮。臣恐陛下雖有救渡之詔、猶必沉吟、未便從命也」是後無幾、暴風吹賊船、悉詣休等營下。斬首獲生、賊遂迸散。詔敕諸軍促渡。軍未時進、賊救船遂至。**【吳主伝】**…冬十一月、大風、範等兵溺死者數千、餘軍還江南。曹休使臧霸以輕船五百、敢死萬人襲攻徐陵、燒攻城車、殺略數千人。將軍全琮、徐盛追斬魏将尹盧、殺獲數百。十二月、權使太中大夫鄭泉聘劉備于白帝、始復通也。

曹休伝…文帝即王位、為領軍將軍、錄前後功、封東陽亭侯。夏侯惇薨、以休為鎮南將軍、假節都督諸軍事。車駕臨送、上、乃下輿執手而別。孫權遣將屯歷陽、休到、擊破之。又別遣兵渡江、燒賊蕪湖營數千家。遷征東將軍、領揚州刺史、進封安陽鄉侯。帝征孫權、以休為征東大將軍、假黃鉞。督張遼等、及諸州郡二十餘軍、擊權大將呂範等於洞浦、破之。拜揚州牧。卷九**臧霸伝**…文帝即王位、遷鎮東將軍、進爵武安鄉侯、都督青州諸軍事。及踐阼、進封開陽侯、徙封良成侯。与曹休討吳賊、破呂範於洞浦、徵為執金吾、位特進。每有軍事、帝常咨訪焉。

庚申晦、日有食之。（文帝紀による）

吳王使太中大夫鄭泉聘於漢、漢太中大夫宗璋報之、吳・漢復通。

吳王 太中大夫の鄭泉をして漢に聘せしむ。漢の太中大夫の宗璋 之に報い、吳・漢復た通ず。

維基文庫：吳王使太中大夫鄭泉聘於漢句 按據方北辰『三国志蜀書札記』考証、主動求和並先遣使者是劉備、而非孫權在先。『蜀志 先主伝』章武二（二二二）年云…「冬十月、孫權聞先主在白帝、甚懼、遣使求和。先主許之、遣太中大夫宗璋報命。」『吳志 孫權伝』黄武元（二二二）年云…「十二月、權使太中大夫鄭泉聘劉備於白帝、始復通也。」以上所引の『先主伝』、『吳主伝』兩段史文比較、就会発現問題…劉備派遣宗璋、時在冬十月。孫權派遣鄭泉、時為冬十二月。也就是、宗璋東下在先、鄭泉西上在後、其間有兩月之差。既然宗璋東下在先、自然求和の主動者便应当是劉備、而非孫權。司馬光綜合『先主伝』及『吳主伝』史文、卻未察覺宗璋先於鄭泉兩月前往孫吳、致使次第出現顛倒。吳主伝…十二月權、使太中大夫鄭泉、聘劉備于白帝、始復通也。先主伝…冬十月、詔丞相亮營南北郊於成都。孫權聞先主在白帝、甚懼、遣使請和。先主許之、遣太中大夫宗璋報命。

漢主聞魏師大出、遣陸遜書曰、賊今已在江、漢、吾將復東、將軍謂其能然否。遜答曰、但恐軍新破、創夷未復、始求通親。且当自補、未暇窮兵耳。若不推算、欲復以傾覆之餘遠送以來者、無所逃命。

漢主 魏師の大いに出づるを聞き、陸遜に書を遣りて曰く、「賊今 已に江・漢に在り。吾將に復た東せんとす。將軍 其の能く然否なるを謂ふや」と。遜答へて曰く、「但だ軍の新らに破らるを恐る。創夷 未だ復せず、始めて通親を求む。且つ自補に当り、未だ兵を窮むるの暇あらず。若し推算せざれば、欲復た傾覆の余を以て遠送以來者、所命を逃るる

春正月、曹真 張郃をして吳兵を擊破せしめ、遂に江陵の中洲を奪ひて拠る。

胡三省…去年吳將孫盛據中洲。吳主伝…二年春正月、曹真、分軍據江陵中洲。是月、城江夏山。改四分、用乾象曆。卷九 曹真伝…黄初三年還京都、以真為上軍大將軍、都督中外諸軍事、假節鉞。与夏侯尚等征孫權、擊牛渚屯、破之。転拜中軍大將軍、加給事中。七年文帝寢疾。真与陳羣、司馬宣王等受遺詔輔政。卷十七 張郃伝…文帝即王位、以郃為左將軍、進爵都鄉侯。及踐阼、進封鄭侯。詔郃与曹真討安定盧水胡及東羌。召郃与真並朝許宮、遣南与夏侯尚擊江陵。郃別督諸軍渡江、取洲上屯塢。

## ■黄初四年二月■

二月、諸葛亮至永安。

胡三省…『水経註』、蜀先主為吳所敗、退屯白帝、改白帝為永安、巴東郡治也。

先主伝…三年春二月丞相亮、自成都到永安。

曹仁以步騎數萬向濡須、先揚聲欲東攻羨溪、朱桓分兵赴之。既行、仁以大軍徑進。桓聞之、追還羨溪兵、兵未到而仁奄至。時桓手下及所部兵在者才五千人、諸將業業各有懼心、桓喻之曰、凡兩軍交对、勝負在將、不在衆寡。諸君聞曹仁用兵行師、孰与桓邪。兵法所以称、客倍而主人半者、謂俱在平原無城隍之守、又謂士卒勇怯斉等故耳。今仁既非智勇、加其士卒甚怯、又千里步涉、人馬罷困。桓与諸君共據高城、南臨大江、北背山陵、以逸待勞、為主制客、此百戰百勝之勢、雖曹丕自来、尚不足憂、況仁等邪。桓乃偃旗鼓、外示虛弱以誘致仁。仁遣其子泰攻濡須城、分遣將軍常雕、王雙等乘油船別襲中洲。中洲者、桓部曲妻子所在也。

曹仁 步騎の數方を以て濡須に向ひ、先に東して羨溪を攻めんと欲すと声を揚ぐ。朱桓兵

所無し」と。

胡三省…通親、謂通使而交親也。

陸遜伝 注引『呉録』…劉備聞魏軍大出、書与遜云…「賊今已在江陵、吾將復東、將軍謂其能然不。」遜答曰…「但恐軍新破、創夷未復、始求通親、且当自補、未暇窮兵耳。若不推算、欲復以傾覆之餘、遠送以來者、無所逃命。」

## 漢漢嘉太守黄元叛。

胡三省…漢嘉郡、本前漢青衣果地、属蜀郡。後漢順帝陽嘉二年、改為漢嘉果、属蜀郡属国、蜀分為漢嘉郡。先主伝…冬十二月、漢嘉太守黄元聞先主疾不豫、举兵拒守。

## 吳將孫盛督萬人據江陵中洲、以為南郡外援。

吳將の孫盛 万人を督して江陵の中洲に拠り、以て南郡の外援と為る。

胡三省…據『潘璋伝』、則江陵中洲即百里洲也。其洲自枝江果西至上明、東及江津。江津北岸、即江陵故城。卷五十六 宋然伝…魏遣曹真、夏侯尚、張郃等攻江陵、魏文帝自住宛、為其勢援、連屯圍城。權遣將軍孫盛督萬人備州上、立圍塢、為然外救。郃渡兵攻盛、盛不能拒、即時卻退、郃據州上圍守、然 中外断絶。權遣潘璋、楊粲等解圍、而圍不解。時然城中兵多腫病、堪戰者裁五千人。真等起土山、鑿地道、立樓櫓、臨城弓矢雨注、將士皆失色、然晏如而無恐意、方厲吏士、伺閒隙攻破兩屯。魏攻圍然凡六日、未退。江陵令姚泰領兵備城北門、見外兵盛、城中人少、穀食欲尽、因与敵交通、謀為内応。垂発、事覺、然治戮泰。尚等不能克、乃徹攻退還。由是然名震於敵国、改封当陽侯。

## ■黄初四年正月■

春、正月、曹真使張郃擊破吳兵、遂奪據江陵中洲。

を分けて之に赴く。既に行き、仁 大軍を以て徑進す。桓之を聞き、追ひて羨溪の兵を還せども、兵未だらずして仁 奄ひ至る。時に桓の手下及び所部の兵 在る者は五千人ばかり、諸將業業として各々懼るる心有り。桓之を喻へて曰く、「凡そ兩軍 交对すれば、勝負將に在り、衆寡に在らず。諸君 曹仁の用兵。行師を聞きて、桓と孰いづれぞ。兵法以て称する所の『客は倍して主人は半す』といふは、平原を俱にし城隍無きの守を謂ひ、又士卒の勇怯 斉等なる故を謂ふのみ。今 仁 既に智勇に非ず、加へて其の士卒 甚だ怯たり。又千里を步涉し、人馬 罷困す。桓 諸君と共に高城に拠り、南は大江に臨み、北は山陵を背にし、逸を以て勞を待ち、主と為りて客を制す。此れ百戰百勝の勢なり。曹丕自ら来ると雖も、尚ほ憂ふに足らず。況んや仁等をや」と。桓 乃ち旗鼓を偃し、外に虚弱なるを示して以て仁を誘致す。仁 其の子の泰を遣はして濡須城を攻む。分けて將軍の常雕・王双等を遣はし、油船を乗せて別に中洲を襲ふ。中洲は、桓の部曲の妻子 在る所なり。

胡三省…羨溪在濡須東、而蜀本『註』以為沙羨、誤矣。杜佑曰、羨溪在濡須東三十里。／孔安国曰「業業」、危懼意。／油船、蓋以牛皮為之、外施油以扞水。／囊皋、在廬江居巢果、『春秋』会吳於囊皋、即其地。余按班『志』、囊皋果属九江郡。孟康音拓姑。杜預曰、囊皋在淮南塗道果東南。／去年吳王以朱桓為濡須督。

卷五十六 宋桓伝…後、代周泰、為濡須督。黄武元年。魏、使大司馬曹仁、步騎數萬、向濡須。仁、欲以兵襲取州上、偽先揚聲欲東攻羨溪。桓、分兵將、赴羨溪。既発、卒得仁進軍拒濡須七十里間。桓、遣使追還羨溪兵。兵未到而仁奄至。時、桓手下及所部兵在者五千人、諸將業業各有懼心。桓喻之曰「凡兩軍交对、勝負在將、不在衆寡。諸君聞曹仁用兵行師、孰与桓邪。兵法所以称客倍而主人半者、謂、俱在平原、無城池之守。又謂、士衆勇怯斉等故耳。今、人既非智勇、加其士卒甚怯、又千里步涉、人馬罷困。桓与諸軍、共據高城、南臨大江、北背山陵、以逸待勞、為主制客、此百戰百勝之勢也。雖曹丕自来、尚不足憂。況仁等邪」桓、因偃旗鼓、外示虚弱、以誘致仁。仁、果遣其子泰、攻濡須城、分遣將軍常雕、督諸葛虔、王雙等、乘油船、

別襲中洲。中洲者、部曲妻子所在也。

**吳主伝**…三月曹仁、遣將軍常彫等、以兵五千、乘油船、晨渡瀟湘中州。仁子泰、因引軍急攻朱桓。桓兵拒之、遣將軍嚴圭等、擊破彫等。是月、魏軍皆退。

卷九 **曹仁伝**…及即王位、拜仁車騎將軍、都督荊揚益州諸軍事、進封陳侯、增邑二千、并前三千五百戸。…後、召還屯宛。孫權遣將陳邵、據襄陽。詔仁討之。仁与徐晃攻破邵、遂入襄陽。使將軍高遷等、徙漢南附化民於漢北。文帝遣使、即拜仁大將軍。又詔仁、移屯臨穎、遷大司馬。復督諸軍據烏江、還屯合肥。黄初四年薨。

**蔣濟曰、賊據西岸、列船上流、而兵入洲中、是為自内地獄、危亡之道也。**

**仁不從、自將萬人留橐皋、為泰等後援。桓遣別將擊雕等而身自拒泰、泰燒營退。桓遂斬常雕、生虜王雙、臨陳殺溺死者千餘人。**

蔣濟曰く、「賊 西岸に抛り、船を列ねて流れを上る。而るに兵 洲中に入る。是れ自ら地獄の内と為り、危亡の道なり」と。仁 従はず、自ら万人を將ゐて橐皋に留まり、泰等の為に後援す。桓 別將を遣りて雕等を撃ちて身自から泰を拒む。泰 營を焼きて退く。桓 遂に常雕を斬り、王双を生け虜り、陳に臨みて殺され溺れて死せる者 千余人なり。

卷十四 **蔣濟伝**…黄初三年、与大司馬曹仁征吳、濟別襲羨谿。仁欲攻濡須洲中、濟曰…**賊據西岸、列船上流、而兵入洲中、是為自内地獄、危亡之道也。**仁不從、果敗。仁薨、復以濟 為東中郎將、代領其兵。詔曰…**卿兼資文武、志節慷慨、常有超越江湖吞吳会之志、故復 授將率之任。**頃之、徵為尚書。

卷五十六 **宋桓伝**…仁自將萬人、留橐皋、復為泰等、後拒。桓部兵將攻取油船、或別擊雕等、桓等身自拒泰、燒營而退。遂梟雕、生虜雙、送武昌。臨陳斬溺、死者千餘。權嘉桓功、封嘉興侯、遷奮武將軍、領彭城相。

**初、呂蒙病篤、吳王問曰、卿如不起、誰可代者。蒙対曰、朱然膽守有餘、**

兵多腫病、堪戰者裁五千人。真等起土山、鑿地道、立樓櫓、臨城弓矢雨注、將士皆失色、然晏如而無恐意、方厲吏士、伺隙 隙攻破兩屯。魏攻圍然凡六月日、未退。江陵令姚泰領兵備城北門、見外兵盛、城中人少、穀食欲尽、因与敵交通、謀為内応。垂発、事覺、然治鬻泰。尚等不能克、乃徹攻退還。由是然名震於敵国、改封当陽侯。卷五十二 **諸葛瑾伝**…黄武元年、遷左將軍、督公安、假節、封宛陵侯。

**諸葛瑾伝** 注引『吳録』…曹真、夏侯尚等圍朱然於江陵、又分據中州、瑾以大兵為之救援。瑾性弘緩、推道理、任計畫、無忘卒倚伏之術、兵久不解、權以此望之。及春水生、潘璋等作水城於上流、瑾進攻浮橋、真等退走。雖無大勲、亦以全師保境為功。

時江水淺狹、夏侯尚欲乘船將步騎入渚中安屯、作浮橋、南北往来、議者多以為城必可拔。董昭上疏曰、武皇帝智勇過人、而用兵畏敵、不敢輕之若此也。夫兵好進惡退、常然之数。平地無險、猶尚艱難、就当深入、還道宜利、兵有進退、不可如意。今屯渚中、至深也。浮橋而濟、至危也。

一道而行、至狹也。三者、兵家所忌、而今行之、賊頻攻橋、誤有漏失、渚中精銳非魏之有、將転化為吳矣。臣私感之、忘寢与食、而議者怡然不以為憂、豈不惑哉。加江水向長、一旦暴増、何以防禦。就不破賊、尚当自完、奈何乘危、不以為懼。惟陛下察之。帝即詔尚等促出、吳人兩頭並前、魏兵一道引去、不時得泄、僅而獲濟。吳將潘璋已作荻筏、欲以燒浮橋、会尚退而止。後旬日、江水大漲、帝謂董昭曰、君論此事、何其審也。会天大疫、帝悉召諸軍還。

時に江水 浅狹たり。夏侯尚 乗船して歩騎を將ゐて渚中の安屯に入らんと欲し、浮橋を作り、南北 往来す。議する者 多く以為へらく城は必ず抜く可し。董昭 上疏して曰く、「武皇帝 智勇は人に過ぎて、用兵 敵を畏れしめども、敢へて之を軽ぜざること此の若し。夫

**愚以為可任。朱然者、時為昭武將軍。蒙卒、吳王假然節、鎮江陵。**

初め、呂蒙の病 篤く、吳王 問ひて曰く、「卿 如し起きずんば、誰ぞ代はる可きか」と。蒙 対へてく、「朱然 膽守に余有り、愚 以為へらく任す可し」と。朱然は、時に昭武將軍 為り。蒙 卒し、吳王 然の節を仮りて江陵に鎮せしむ。

胡三省…昭武將軍、吳所置也。卷五十六 **宋然伝**…虎威將軍呂蒙病篤、權問曰…**卿如不起、誰可代者。**蒙対曰…**朱然膽守有餘、愚以為可任。**蒙卒、權假然節、鎮江陵。黄武元年、劉備率兵攻宜都、然督五千人与陸遜并力拒備。然別攻破備前鋒、断其後道、備遂破走。拜征北將軍、封永安侯。

**及曹真等圍江陵、破孫盛、吳王遣諸葛瑾等將兵往解圍、夏侯尚擊卻之。江陵中外断絶、城中兵多腫病、堪戰者裁五千人。真等起土山、鑿地道、立樓櫓臨城、弓矢雨注、將士皆失色。然晏如無恐意、方厲吏士、伺間隙、攻破魏兩屯。魏兵圍然凡六月、江陵令姚泰領兵備城北門、見外兵盛、城中人少、穀食且尽、懼不濟、謀為内応、然覺而殺之。**

曹真等 江陵を囲むに及び、孫盛を破る。吳王 諸葛瑾等を遣りて兵を將ゐて往き囲ひを解かしむ。夏侯尚 之を撃却す。江陵 中外は断絶し、城中の兵 多く腫病す。戦に堪ふる者 五千人を裁つ。真等 土山を起し、地道を鑿ち、樓櫓を立てて城に臨み、弓矢 雨のごとく注ぎ、將士 皆色を失ふ。然れば晏如たりて恐るる意無く、方に吏士を厲まし、間隙を伺ひ、魏の兩屯を攻破せん。魏兵 囲みて然ること凡そ六月なり。江陵令の姚泰 兵を領して城の北門に備へ、外兵の盛なるを見る。城中の人 少なく、穀食 且に尽きんとす。懼れて 濟はず、謀りて内応を為し、然るに覺して之を殺す。

卷五十六 **宋然伝**…魏遣曹真、夏侯尚、張郃等攻江陵、魏文帝自住宛、為其勢援、連屯圍城。權遣將軍孫盛督萬人備州上、立圍塙、為然外救。郃渡兵攻盛、盛不能拒、即時卻退、郃據州上圍守、然中外断絶。權遣潘璋、楊繁等解圍而圍不解。時然城中

れ兵 進むを好み退くを惡み、常に之を然りとする こと数なり。平地 險無くとも、猶ほ尚艱難あるがごとく、就きて当に深入すれば、還道 宜しく利あるべし。兵に進退有りて、意の如くなる可からず。今 渚中に屯すること、至深なり。橋を浮べて濟ること、至危なり。一道より行くこと、至狹なり。三つなる者、兵家の忌む所なり。而るに今 之を行なふ。賊 頻りに橋を攻め、誤りて漏失有れば、渚中の精銳 魏の有に非ず。將に転化して吳と為らんとす。臣 私かに之を感ひ、寢と食とを忘る。而るに議者 怡然として憂を為すを以てせず。豈に感はざらんや。加へて江水 向長たり。一旦にして暴かに増えれば、何を以て防禦せん。就きて賊を破らず、尚当に自ら完うすべし。奈何(なんぞ) 危に乘じ、以て懼れを為さざるや。惟れ陛下 之を察せよ」と。帝 即ち尚等に詔して出づるを促す。吳人 兩頭より並前し、魏兵 一道より引去す。時ならず泄れを得て、僅かにして濟を獲たり。吳將の潘璋 已に荻筏を作り、以て浮橋を焼かんと欲す。会々尚 退きて止む。後の旬日、江水 大いに漲り、帝 董昭に謂ひて曰く、「君 此の事を論ず。何ぞ其れ審らかなるや」と。会々天 大疫あり、帝 悉く諸軍を召して還す。

胡三省…渚、洲也、即江陵之中洲也。「不敢輕之若此也」は、言行兵不敢履危道。卷十四 **董昭伝**…大駕幸宛、征南大將軍夏侯尚等攻江陵、未拔。時江水淺狹、尚欲乗船將步騎入渚中安屯、作浮橋、南北往来。議者多以為城必可拔。昭上疏曰「武皇帝、智勇過人而用兵畏敵、不敢輕之若此也。夫兵好進惡退、常然之数。平地無險、猶尚艱難。就当深入、還道宜利。兵有進退、不可如意。今屯渚中、至深也。浮橋而濟、至危也。一道而行、至狹也。三者兵家所忌、而今行之。賊頻攻橋、誤有漏失、渚中精銳非魏之有、將転化為吳矣。臣私感之忘寢与食、而議者怡然不以為憂、豈不惑哉。加江水向長、一旦暴増、何以防禦。就不破賊、尚当自完。奈何乘危、不以為懼。事將危矣、惟陛下察之」帝悟昭言、即詔尚等促出。賊兩頭並前、官兵 一道引去、不時得泄。將軍石建、高遷僅得自免。軍出旬日、江水暴長。帝曰「君論此事、何其審也。正使張陳当之、何以復加」五年、徙封成都鄉侯、拜太常。其年、徙光祿大夫給事中。從大駕東征、七年還、拜太僕。卷五十五 **潘璋伝**…魏將夏侯尚等、圍南郡、分前部三

萬人、作浮橋、渡百里洲上。諸葛瑾、楊粲、並会兵赴救、未知所出、而魏兵日渡不絕。璋曰「魏勢始盛、江水又淺。未可与戰」便將所領、到魏上流五十里、伐葦數百萬束、縛作大筏、欲順流放火、燒敗浮橋。作筏適畢、伺水長当下、尚便引退。璋、下、備陸口。權稱尊号、拜右將軍。

■黄初四年三月■  
三月、丙申、車駕還洛陽。（文帝紀による）

初、帝問賈詡曰、吾欲伐不從命、以一天下、吳、蜀何先。対曰、攻取者先兵權、建本者尚德化。陛下応期受禪、撫臨率土、若綏之以文德而俟其變、則平之不難矣。吳、蜀雖蕞爾小国、依山阻水。劉備有雄才、諸葛亮善治国。孫權識虚実、陸遜見兵勢。據險守要、泛舟江湖、皆難卒謀也。用兵之道、先勝後戰、量敵論將。故拳無遺策。臣竊料群臣無備、權対、雖以天威臨之、未見萬全之勢也。昔舜舞干戚而有苗服、臣以為当今宜先文後武。」帝不納、軍竟無功。

初め、帝 賈詡に問ひて曰く、「吾命に従はざるを伐ち、以て天下を一にせんと欲す。吳・蜀何れをか先にせん」と。対へて曰く、「攻取は兵權に先んずれども、本を建つるは尚ほ徳化なり。陛下 期に應じて受禪し、率土を撫臨す。若し之を綏するに文徳を以てして其の變を俟てば、則ち之を平らくこと難かたからず。吳・蜀 蕞爾の小国と雖も、山に依り水に阻む。劉備 雄才有り、諸葛亮 善く治国す。孫權 虚実を識り、陸遜 兵勢を見る。險に拠り要を守り、江湖に泛舟す。皆 卒かに謀ること難し。用兵の道、先に勝ちて後に戦ひ、敵を量りて將を論ずるにあり。故に遺策無きを挙げ。臣 竊かに料るに、群臣 備・權に對(かな)ふもの無く、天威を以て之に臨むと雖も、未だ万全の勢を見ず。昔 舜 干戚を舞ひて苗服有り。臣 以為へらく当今 宜しく文を先とし武を後とすべし」と。帝 納れ

便ち得るのみ」と。元の軍 敗れ、果して江に順ひて東下す。詔・綽 生け獲り、之を斬る。胡三省：臨邛県、漢屬蜀郡。蜀既分置漢嘉郡、則此時当属漢嘉。／此順蜀青衣水東下也。『水経註』、青衣水出青衣県西蒙山、東至蜀郡臨邛県与沫水合、又東至犍為南安県入於江、所謂南安峽口也。

卷四十一 楊洪伝：漢嘉太守黄元素為諸葛亮所不善、聞先主疾病、懼有後患、举郡反、燒臨邛城。時亮東行省疾、成都單虚、是以元益無所懼。洪即啟太子、遣其親兵、使將軍陳習、鄭綽討元。衆議以為元若不能圍成都、当由越嶲據南中、洪曰：「元素性凶暴、無他恩信、何能辦此。不過乘水東下、冀主上平安、面縛歸死。如其有異、奔吳求活耳。敕習、綽但於南安峽口遮即便得矣。」習、綽承洪言、果生獲元。洪建興元年賜 爵関内侯、復為蜀郡太守、忠節將軍、後為越騎校尉、領郡如故。

■黄初四年四月■  
漢主病篤、命丞相亮輔太子、以尚書令李嚴為副。漢主謂亮曰、君才十倍曹丕、必能安国、終定大事。若嗣子可輔、輔之。如其不才、君可自取。夏四月(癸巳)〔壬午〕、漢主殂於永安、諡曰昭烈。

漢主 病ひ篤く、丞相の亮に命じて太子を輔せしむ。尚書令の李嚴を以て副と為す。漢主 亮に謂ひて曰く、「君の才 曹丕に十倍す。必ず能く国を安じ、終に大事を定めよ。若し嗣子 輔く可きなれば、之を輔けよ。如其れ不才なれば、君 自ら取る可し」と。夏四月、漢主 永安に殂し、諡して昭烈と曰ふ。

胡三省：『諡法』、昭德有勞曰昭、有功安民曰烈。維基文庫：(壬午) (癸巳) 四月己未朔、無癸巳。據『蜀志、先主伝』雲「今日二十四日奄忽升遐」、是月二十四日為壬午、據改。按此癸巳疑是上諡号之日。先主伝：先主病篤、託孤於丞相亮、尚書令李嚴為副。夏四月癸巳、先主殂于永安宮、時年六十三。

諸葛亮伝：章武三年春、先主於永安病篤、召亮於成都、属以後事。謂亮曰「君才十

ず、軍に竟に功無し。

胡三省：(苗服は) 舜誕敷文徳、舞干羽於兩階、七旬有苗格。卷十 賈詡伝：文帝即位、以詡為太尉。帝問詡曰「吾欲伐不從命、以一天下。吳、蜀何先。」対曰「攻取者先兵權、建本者尚德化。陛下 応期受禪、撫臨率土。若綏之以文德而俟其變、則平之不難矣。吳蜀雖蕞爾小国、依山阻水。劉備有雄才、諸葛亮善治国。孫權識虚実、陸議見兵勢。據險守要、汎舟江湖、皆難卒謀也。用兵之道、先勝後戰、量敵論將、故拳無遺策。臣竊料羣臣、無備權対。雖以天威臨之、未見萬全之勢也。昔舜、舞干戚而有苗服。臣以為、当今宜先文後武」文帝不納。後、興江陵之役、士卒多死。

丁未、陳忠侯曹仁卒。（文帝紀による）

初、黄元為諸葛亮所不善、聞漢主疾病、懼有後患、故拳郡反、燒臨邛城。時亮東行省疾、成都單虚、元益無所懼。益州治中從事楊洪、啟太子遣將軍陳習、鄭綽討元。衆議以為元若不能圍成都、当由越嶲據南中。洪曰、元素性凶暴、無他恩信、何能辦此。不過乘水東下、冀主上平安、面縛歸死。如其有異、奔吳求活耳。但敕習、綽於南安峽口邀遮、即便得矣。元 軍敗、果順江東下、習、綽生獲、斬之。

初め、黄元 諸葛亮の善しとせざる所と為り、漢主の疾病たるを聞き、後患有るを懼れ、故に郡を挙げて反き、臨邛城を燒く。時に亮 東行して疾を省る。成都 单虚たり。元 益々 憚かる所無し。益州治中 從事の楊洪、太子に啓して將軍の陳習・鄭綽を遣はしめ元を討つ。衆議 以為へらく元 若し成都を囲むこと能はずんば、当に越嶲に由りて南中に拠るべしと。洪曰く、「元 素より性は凶暴にして、他に恩信無し。何ぞ能く此を弁ぜんや。水に乗じて東下するに過ぎず、主上の平安なるを冀ひ、面縛して死に帰す。如其れ異有れば、吳に奔りて活を求むるのみ。但だ習・綽に敕して南安の峽口に於いて邀遮せしむれば、即

倍曹丕、必能安国、終定大事。若嗣子可輔、輔之。如其不才、君可自取。」

丞相亮奉喪還成都、以李嚴為中都護、留鎮永安。

丞相の亮 喪を奉じて成都に還る。李嚴を以て中都護と為し、永安に留鎮せしむ。

先主伝：五月、梓宮自永安還成都。諡曰、昭烈皇帝。秋八月、葬惠陵。

■黄初四年五月■  
五月、太子禪即位、時年十七。尊皇后曰皇太后、大赦、改元建興。封丞相亮為武鄉侯、領益州牧、政事無鉅細、鹹決於亮。亮乃約官職、修法制、發教与群下。

五月、太子の禪 即位す。時に年は十七なり。皇后を尊びて皇太后と曰ひ、大赦し、建興を改元す。丞相の亮を封じて武郷侯と為し、益州牧を領せしむ。政事 鉅細と無く、鹹 亮に決せらる。亮 乃ち官職を約し、法制を修め、教を發して群下に与ふ。

胡三省：以先主、孔明君臣之相得、而約官職、脩法制乃行於輔後主之時、此『易』之戒浚恒也。後主伝：三年夏四月先主殂于永安宮。五月後主襲位於成都、時年十七。尊皇后曰皇太后。大赦、改元。是歲魏黄初四年也。諸葛亮伝：建興元年、封亮武郷侯、開府治事。頃之、又領益州牧。政事、無巨細、咸決於亮。南中諸郡、並皆叛乱。亮、以新遭大喪、故未便加兵。且遣使聘吳、因結和親、遂為与国。

■黄初四年六月■

六月、甲戌、任城威王彰卒。甲申、魏寿肅侯賈詡卒。大水。

胡三省：『諡法』、猛以強果曰威。服叛定功曰威。魏寿、亭名。『諡法』、剛德克就曰肅。執心決斷曰肅。文帝紀：六月甲戌、任城王彰薨於京都。甲申、太尉賈詡薨。太白晝見。是月大雨、伊洛溢流、殺人民壞廬宅。

## 呉賀斉襲蕪春、虜太守晋宗以帰。

呉の賀斉、蕪春を襲ひ、太守の晋宗を虜として以て帰る。

胡三省…蕪春、漢属江夏郡。呉分立蕪春郡、即蕪陽也、東晋避諱改焉。『水経』、蕪水出江夏蕪春県北山。『註』雲、即蕪山也、西南流逕蕪山、又南对蕪陽、会於大江、亦謂之蕪河口。據『賀斉伝』、晋宗、呉将也、叛降魏、還為蕪春太守、斉襲而虜之。**〔呉主伝〕**…五月曲阿言、甘露降。先是、戯口守将晋宗、殺将王直、以衆叛如魏。魏以**〔蕪春太守〕**、數犯邊境。六月、令將軍賀斉、督麋芳劉邵等、襲蕪春。邵等、生虜宗。卷五十二**〔賀斉伝〕**…初、晋宗、為戯口将、以衆叛如魏。還為蕪春太守、凶襲安樂、取其保質。權、以為恥忿、因軍初罷、六月盛夏、出其不意。詔斉、督麋芳、鮮于丹等、襲蕪春、遂生虜宗。後四年卒。

初、益州郡耆帥雍闓殺太守正昂、因士燮以求附於呉、又執太守成都張裔以与呉、呉以闓為永昌太守。永昌功曹呂凱、府丞王伉率吏士閉境拒守、闓不能進、使郡人孟獲誘扇諸夷、諸夷皆從之。牂柯太守朱褒、越嶲夷王高定皆叛心闓。諸葛亮以新遭大喪、皆撫而不討、務農殖穀、閉関息民、民安食足而後用之。

初め、益州郡の耆帥の雍闓、太守の正昂を殺す。士燮に因りて以て呉に求付せんと求付む。又太守の成都の張裔を執へて以て呉に与ふ。呉、闓を以て永昌太守と為す。永昌功曹の呂凱、府丞の王伉、吏士を率ゐて境を閉じて拒守し、闓、進むこと能はず。郡人の孟獲をして諸夷を誘扇せしめ、諸夷皆之に従ふ。牂柯太守の朱褒、越嶲夷王の高定、皆叛きて闓に応ず。諸葛亮、新たに大喪に遭ふを以て、皆撫して討たず。農に務めて穀を殖やし、関を閉じて民を息ます。民食の足るに安じて後に之を用ふ。

胡三省…耆、長也、老也。今岷、刻之間、猶謂閬里之長曰耆。闓自交州道求附於呉。是の時三公事無く、又希に朝政に与る。柔上疏して曰く、「公輔の臣、皆国の棟樑なり。民の具瞻する所にして、之に三事を置く。政を知らしめざれば、遂に各々息を偃し高を養ひ、進納有ること鮮し。誠に朝廷、大臣を崇用するの義、大臣替す可きを献するの謂に非ず。古者、刑政に疑有れば、輒ち槐・棘の下に議す。自今の後、朝に疑議有りて刑獄に大事あるに及ばば、宜しく数々以て三公を咨訪すべし。三公、朔・望の日に朝し、又可特延入講論得失、博尽事情、庶有補起天聰、光益大化。」帝嘉して焉を納る。

胡三省…漢宣帝幸宣室、齋居決事、令侍御史二人治書侍側、後因別置、謂之治書侍御史。及魏又置治書執法、掌奏劾、而治書侍御史掌律令、二官俱置。及晋、唯置治書侍御史四人。／『詩』曰、赫赫師尹、民具爾瞻。古者謂三公為三事。『詩』曰、三事大夫。謂三公也。偃息、言偃臥以自安也。齊晏子曰、君所謂可而有否焉、臣獻其否以成其可。君所謂否而有可焉、臣獻其可而去其否。『周礼』、朝士掌外朝之法、面三槐、三公位焉。左九棘、孤卿大夫位焉。鄭『註』雲、樹棘以為位者、取其赤心而外刺、象以赤心三刺也。槐之言懷也。懷來人於此、欲与之謀。『王制』曰、成獄辭、史以獄成告於正、正聽之。正以獄成告於大司寇、大司寇聽之於棘木之下。大司寇以獄之成告於王、王命三公參聽之。卷二十四**〔高柔伝〕**…魏初、三公無事、又希与朝政。柔上疏曰「天地以四時成功、元首以輔弼興治。成湯仗阿衡之佐、文武憑旦望之力、逮至漢初、蕭曹之儔並以元勳代作心膂。此、皆明王聖主任臣於上、賢相良輔股肱於下也。今公輔之臣、皆国之棟樑、民所具瞻。而置之三事、不使知政、遂各偃息養高、鮮有進納。誠非朝廷崇用大臣之義、大臣獻可替否之謂也。古者刑政、有疑輒議於槐棘之下。自今之後、朝有疑議及刑獄大事、宜數以咨訪三公。三公朝朔望之日、又可特延入、講論得失、博尽事情。庶有裨起天聰、弘益大化」帝嘉納焉。

## 辛未、帝校獵於榮陽、遂東巡。（文帝紀による）

**〔後主伝〕**…益州郡有大姓雍闓反、流太守張裔於呉、據郡不賓、越嶲夷王高定亦背叛。

卷四十三**〔馬忠伝〕**…建寧郡殺太守正昂、縛太守張裔於呉、故都督常駐平夷県。至忠、乃移治味県、處民夷之間。又越嶲郡亦久失土地、忠率将太守張巖開復旧郡、由此就加安南將軍、進封彭郷亭侯。卷五十二**〔步騭伝〕**…益州大姓雍闓等殺蜀太守正昂、与燮相聞、求欲内附。騭因承制遣使宣恩撫納、由是加拜平戎將軍、封廣信侯。孟獲は、諸葛亮伝（三年春、亮率衆南征）及び同注引『漢晋春秋』による。

## ■黄初四年八月■

秋、八月、丁卯、以廷尉鍾繇為太尉、治書執法高柔代為廷尉。

秋八月丁卯、廷尉の鍾繇を以て太尉と為し、治書執法の高柔代へて廷尉と為す。

**〔文帝紀〕**…秋八月丁卯以廷尉鍾繇為太尉。卷二十四**〔高柔伝〕**…文帝踐阼、以柔為治書侍御史、賜爵関内侯、転加治書執法。民間、數有誹謗妖言、帝疾之。有妖言、輒殺而賞告者。柔上疏曰「今妖言者必戮、告之者輒賞。既使過誤無反善之路、又将開凶狡之羣相誣罔之漸。誠非所以息奸省訟緝熙治道也。昔周公作誥、称殷之祖宗、咸不顧小人之怨。在漢太宗亦除妖言誹謗之令。臣愚以為、宜除妖謗賞告之法、以隆天父養物之仁」帝不即從、而相誣告者滋甚。帝乃下詔「敢以誹謗相告者、以所告者罪罪之」於是遂絶。校事劉慈等、自黄初初數年之間、舉吏民姦罪以萬數。柔皆請懲虛実。其餘小小挂法者、不過罰金。四年、遷為廷尉。

是時三公無事、又希与朝政、柔上疏曰、公輔之臣、皆国之棟樑、民所具瞻、而置之三事、不使知政、遂各偃息養高、鮮有進納、誠非朝廷崇用大臣之義、大臣獻可替否之謂也。古者刑政有疑、輒議於槐、棘之下。自今之後、朝有疑議及刑獄大事、宜數以咨訪三公。三公朝朔、望之日、又可特延入講論得失、博尽事情、庶有補起天聰、光益大化。帝嘉納焉。

## ■黄初四年九月■

九月、甲辰、如許昌。（文帝紀による）

## ■黄初四年十月■

漢尚書義陽鄧芝言於諸葛亮曰、今主上幼弱、初即尊位、宜遣大使重申呉好。亮曰、吾思之久矣、未得其人耳、今日始得之。芝問、其人為誰。亮曰、即使君也。乃遣芝以中郎将修好於呉。冬、十月、芝至呉。時呉王猶未与魏絶、狐疑、不時見芝。芝乃自表請見曰、臣今來、亦欲為呉、非但為蜀也。呉王見之、曰、孤誠願与蜀和親、然恐蜀主幼弱、國小勢逼、為魏所乘、不自保全耳。芝对曰、呉・蜀二国、四州之地。大王命世之英、諸葛亮亦一時之傑也。蜀有重險之固、吳有三江之阻。合此二長、共為唇齒、進可並兼天下、退可鼎足而立、此理之自然也。大王今若委質於魏、魏必上望大王之入朝、下求太子之内侍、若不從命、則奉辭伐叛、蜀亦順流見可而進。如此、江南之地非復大王之有也。呉王默然良久曰、君言是也。遂絶魏、專与漢連和。

漢の尚書たる義陽の鄧芝、諸葛亮に言ひて曰く、「今主上幼弱たり、初めて尊位に即き、宜しく大使を遣して呉との好を重申すべし」と。亮曰く、「吾之を思ふこと久しけれども、未だ其の人を得ざるのみ。今日始めて之を得たり」と。芝問ふらく、「其の人誰為るか」と。亮曰く、「即ち使君なり」と。乃ち芝をして中郎将たるを以て遣はしめ呉と修好す。冬十月、芝、呉に至る。時に呉王、猶ほ未だ魏と絶へず、狐疑して時に芝に見はず。芝乃ち自ら表して見を請ひて曰く、「臣今来るは、亦呉の為を欲すればなり。但だ蜀の為のみに非ず」と。呉王、之に見ひて曰く、「孤誠に蜀と和親するを願ふ。然るに蜀主は幼弱たり、国は小にして勢は逼まり、魏の乗ずる所と為り、自ら保全せざるを恐るるのみ」と。



芝対へて曰く、「吳・蜀の二国、四州の地なり。大王は命世の英なり、諸葛亮も亦一時の傑なり。蜀に重險の固有り、吳に三江の阻有り。此の二長を合はすれば、共に唇齒と為り、進めば天下を並兼す可し、退けば鼎足して立つ可し。此れ理の自然なり。大王今若し魏に委質すれば、魏必ずや上は大王の入朝を望み、下は太子の内侍を求めん。若し命に従はざれば、則ち辞を奉じて叛を伐ち、蜀も亦流に順ひて可を見て進まん。此の如くんば、江南の地復た大王の有に非ず」と。吳王黙然として良に久しくて曰く、「君の言是なり」と。遂に魏と絶へ、専ら漢と連和す。

胡三省…申、亦重也。所以申固盟約也。四州、荆、揚、梁、益也。／重險、謂外有斜、駱、子午之險、内有劍閣之險也。韋昭曰、三江、吳松江、钱塘江、浦陽江也。『吳地記』雲、松江東北行七十里得三江口、東北入海為婁江、東南入海為東江、并松江為三江。卷四十五 **鄧芝伝**…先主薨於永安。先是、吳王孫權請和。先主、累遣宋瑋費禪等、与相報答。丞相諸葛亮、深慮權開先主阻隕、恐有異計、未知所如。芝、見亮曰、今、主上幼弱…權默然良久曰…「君言是也。」遂自絶魏、与蜀連和、遣張温報聘於蜀（問答は鄧芝伝による）。**吳主伝**…冬十一月蜀使中郎將鄧芝、來聘。

## 是歳、漢主立妃張氏為皇后。

**後主伝**…是歳、主皇后張氏。遣尚書郎鄧芝、固好於吳。吳王孫權与蜀和親、使聘、是歳通好。

## ■黄初五年二月

### 春、二月、帝自許昌還洛陽。

維基文庫…二月 據章校及『魏志・文帝紀』、均作「三月」。**文帝紀**…三月行自許昌還洛陽宮。

対曰、天無二日、土無二王。如並魏之後、大王未深識天命、君各茂其德、臣各尽其忠、將提枹鼓、則戰爭方始耳。吳王大笑曰、君之誠款乃当爾邪。

漢復た鄧芝を遣はして吳に聘せしむ。吳主之に謂ひて曰く、「若し天下 太平たれば、二主分治す。亦た楽しからずや」と。芝対へて曰く、「天に二日無く、土に二王無し。如し魏を並はずの後、大王未だ深く天命を識り、君各々其の徳を茂にし、臣各々其の忠を尽さずんば、將に枹鼓を提げ、則ち戰爭方に始むるのみ」と。吳王大笑して曰く、「君の誠款乃ち当に爾とすべきか」と。

卷三十八 **案宓伝**…益州辟宓為從事祭酒。先主既称尊号、将東征吳、宓陳天時必無其利、坐下獄幽閉、然後貸出。建興二年、丞相亮領益州牧、選宓迎為別駕、尋拜左中郎將、長水校尉。吳遣使張温來聘、百官皆往饒焉。衆人皆集而宓未往、亮累遣使促之、温曰…「彼何人也。」亮曰…「益州学士也。」及至、温問曰…「君学乎。」宓曰…「五尺童子皆学、何必小人…」。卷四十五 **鄧芝伝**…蜀、復合芝重往、權謂芝曰「若天下太平、二主分治、不亦楽乎」芝対曰「夫、天無二日、土無二王。如并魏之後、大王未深識天命者也。君、各茂其德。臣、各尽其忠。將提枹鼓則戰爭方始耳」權大笑曰「君之誠款、乃当爾邪」權与亮書曰「丁太、揆張。陰化、不尽。和合二国、唯有鄧芝」及亮北住漢中、以芝為中監軍、揚武將軍。亮卒、遷前軍師前將軍、領褒州刺史、封陽武亭侯、頃之、為督江州。權、数与芝相聞、饋遺優渥。

## ■黄初五年七月

秋、七月、帝東巡、如許昌。帝欲大興軍伐吳、侍中辛毗諫曰、方今天下新定、土廣民稀、而欲用之、臣誠未見其利也。先帝屢起銳師、臨江而旋。今六軍不増於故、而復循之、此未易也。今日之計、莫若養民屯田、十年然後用之、則役不再举矣。帝曰、如卿意、更当以虜遺子孫邪。対曰、昔周文王以紂遺武王、惟知時也。帝不從、留尚書僕射司馬懿鎮許昌。

## ■黄初五年四月

初平以来、学道廢墜。夏、四月、初立太学。置博士、依漢制設『五經』課試之法。

初平より以来、学道 廢墜す。夏四月、初めて太学を立て、博士を置き、漢制に依りて『五經』課試の法を設く。

胡三省…博士課試之法、始於漢武帝、事見十九卷元朔五年。平帝時、歲課甲科四十人為郎中、乙科二十八人為太子舍人、丙科四十人補文学掌故。東都『五經』立十四博士、皆以家法教授。『古文尚書』、『毛詩』、『穀梁』、『左氏春秋』雖不立学官、然皆擢高第為講郎、給事近署。順帝増甲乙之科、員各十人。

**文帝紀**…夏四月立太学、制五經課試之法、置春秋穀梁博士。

吳王使輔義中郎將吳郡張温聘於漢、自是吳・漢信使不絶。時事所宜、吳主常令陸遜語諸葛亮。又刻印置遜所、王每与漢主及諸葛亮書、常過示遜、輕重、可否有所不安、每令改定、以印封之。

吳王 輔義中郎將たる吳郡の張温をして漢に聘せしむ。是自り、吳・漢 信使 絶えず。時事の所宜、吳主 常に陸遜をして諸葛亮に語らしむ。又刻印 遜の所に置き、王 毎に漢主及び諸葛亮に書を与ふるとき、常に過ぎて遜に示し、輕重・可否 安ぜざる所有れば、毎に改定せしめ、印を以て之を封す。

胡三省…『釋名』曰、印、信也、所以封物以為驗也。亦曰因也、封物相因付也。

**吳主伝** 黄武三年…三年夏、遣輔義中郎將張温聘于蜀。卷五十八 **陸遜伝**…備、尋病亡、子禰襲位。諸葛亮秉政、与權連和。時事所宜、權輒令遜、語亮。并刻權印、以置遜所。權、每与禰亮書、常過示遜、輕重可否、有所不安、便令改定、以印封行之。

漢復遣鄧芝聘於吳、吳主謂之曰、若天下太平、二主分治、不亦楽乎。芝

秋七月、帝東巡し、許昌に如く。帝大いに軍を興して吳を伐たんと欲す。侍中の辛毗諫めて曰く、「方今 天下 新たに定まり、土は広く民は稀なり。而るに之を用ゐんと欲せば、臣誠に未だ其の利を見ざるなり。先帝 屢々銳師を起し、江に臨めども旋る。今六軍 故より増さず、而るに復た之を循る。此れ未だ易からず。今日の計、養民・屯田するに若くは莫し。十年して然る後、之を用ゐれば、役再び挙げず」と。帝曰く、「卿の意の如くんば、更めて当に虜を以て子孫に遺すや」と。対へて曰く、「昔 周文王 紂を以て武王に遺す。惟だ時を知るのみ」と。帝 従はず、尚書僕射の司馬懿を留めて許昌に鎮せしむ。

胡三省…脩之、謂脩怨也。『左伝』曰、将脩先君之怨。

**辛毗伝**…上軍大將軍曹真征朱然于江陵、毗行軍師。還、封廣平亭侯。帝欲大興軍征吳、毗諫曰「吳楚之民、險而難禦。道隆後服、道洿先叛。自古患之、非徒今也。今陛下祚有海内、夫不賓者其能久乎。昔尉佗、称帝。子陽、僭号、歷年未幾或臣或誅。何則、違逆之道不久全、而大徳無所不服也。方今天下新定、土廣、民稀。夫、廟算而後出軍、猶臨事而懼。況今廟算有闕、而欲用之。臣誠未見其利也。先帝屢起銳師、臨江而旋。今六軍不増於故而復循之、此未易也。今日之計莫若、脩范蠡之養民、法管仲之寄政、則充国之屯田、明仲尼之懷遠。十年之中、疆壯未老、童叟勝戰、兆民知義、將士思奮。然後用之則役不再举矣」帝曰「如卿意、更当以虜遺子孫邪」毗対曰「昔周文王以紂遺武王、惟知時也。苟時未可、容得已乎」帝竟伐吳、至江而還。

**文帝紀**…秋七月行東巡幸許昌宮。**文帝紀**注引『魏略』…其以尚書令穎鄉侯陳羣為鎮軍大將軍、尚書僕射西鄉侯司馬懿為撫軍大將軍。若吾臨江授諸將方略、則撫軍當留許昌、督後諸軍、錄後臺文書事。鎮軍隨車駕、當董督衆軍、錄行尚書事」

## ■黄初五年八月

八月、為水軍、親御龍舟、循蔡、潁、浮淮如寿春。

八月、水軍を為し、親ら龍舟を御し、蔡・頴を循り、淮に浮びて寿春に如く。

胡三省…魏收『地形志』、陳留扶溝県有蔡河。『水経』、蔡河自陳留浚儀東南流入於頴。頴水出頴川陽城県少室山、東南流至新陽、与蔡河合、又東南至慎県東南、入於淮。〔文帝紀〕…八月為水軍親御龍舟、循蔡頴浮淮幸寿春。

■黄初五年九月■  
九月、至廣陵。（文帝紀による）

吳安東將軍徐盛建計、植木衣葦、為疑城假樓、自石頭至於江乘、聯綿相接數百里、一夕而成。又大浮舟艦於江。時江水盛長、帝臨望、嘆曰、魏雖有武騎千群、無所用之、未可圖也。

吳の安東將軍の徐盛 計を建て、木を植へ葦を衣ひ、疑城・假樓を為る。石頭自り江乘に至るまで、連綿として相接すること數百里、一夕にして成る。又大いに舟艦を江に浮ぶ。時に江水盛長たり。帝 臨望して、嘆きて曰く、「魏 武騎千群有りと雖も、之を用ゐる所無し。未だ図る可からず」と。

胡三省…植木於内、以蘆蔭遮其外、為疑城假樓。今淮甸諸郡城敵樓、皆以蘆蔭遮護之。江乘県属丹陽郡、吳省為典農都尉治、其地在建業東北。

卷五十五 〔徐盛伝〕…後、遷建武將軍、封都亭侯、領廬江太守、賜臨城県、為奉邑。劉備次西陵、盛攻取諸屯、所向有功。曹休出洞口、盛与呂範全琮、渡江拒守。遭大風、船人多喪、盛收餘兵、与休夾江。休使兵將就船攻盛、盛以少禦多、敵不能克、各引軍退。遷安東將軍、封蕪湖侯。後魏文帝大出、有渡江之志。盛建計、從建業築圍、作薄落、圍上設假樓、江中浮船。諸將以為無益、盛不聽、固立之。文帝到廣陵、望圍愕然、弥漫數百里、而江水盛長、便引軍退。諸將乃伏。

〔徐盛伝〕 注引『魏氏春秋』…文帝歎曰「魏雖有武騎千羣、無所用也。」

是の時、曹休 表して降賊の辞を得たりと。「孫權 已に濡須口に在り」と。中領軍の衛臻曰く、「權 長江を恃み、未だ敢へて亢衡せず。此れ必ず偽辞を畏怖するのみ」と。降者を考核し、果して守將 作す所なり。

胡三省…『晋・百官志』曰、漢建安四年、魏武丞相府置中領軍。文帝踐阼、始置領軍將軍、置長史、司馬。江左以後、資重者為領軍將軍、資輕者為中領軍。沈約『志』曰、領軍掌内軍、漢武帝置中壘校尉、掌北軍營。光武省、置北軍中候、監五校營。魏武為丞相、相府自置領軍、非漢官也。文帝以領軍主五校、中壘、武衛三營。晋武帝初、省。使中軍將軍羊祜統二衛、前、後、左、右、驍騎七軍、即領軍之任也。祜遷、復置北軍中候。懷帝永嘉中、又改曰中領軍。卷二十二 〔衛臻伝〕…文帝即王位、為散騎常侍。及踐阼、封安国亭侯。時羣臣、並頌魏德、多抑損前朝。臻独、明禪授之義、称揚漢美。帝數目臻曰「天下之珍、当与山陽共之」遷尚書、転侍中吏部尚書。帝幸廣陵、行中領軍、從。征軍大將軍曹休、表得降賊辞「孫權已在濡須口」臻曰「權、恃長江、未敢抗衡。此必畏怖偽辞耳」考核降者、果守將詐所作也。

■黄初五年十月■  
冬、十月、帝還許昌。（文帝紀による）

■黄初五年十一月■  
十一月、戊申晦、日有食之。（文帝紀による）

鮮卑軻比能誘步度根兄扶羅韓殺之、步度根由是怨軻比能、更相攻撃。步度根部衆稍弱、將其衆萬餘落保太原、雁門。是歲、詣闕貢獻。而軻比能衆遂強盛、出擊東部大人素利。護烏丸校尉田豫乘虛掩其後、軻比能使別帥瑣奴拒豫、豫擊破之。軻比能由是攜貳、數為邊寇、幽・并苦之。

帝御龍舟、会暴風漂蕩、幾至覆沒。帝問群臣、權当自来否。咸曰、陛下親征、權恐怖、必举国而応。又不敢以大衆委之臣下、必当自来。劉曄曰、彼謂陛下欲以萬乘之重牽己、而超越江湖者在於別將、必勒兵待事、未有進退也。大駕停住積日、吳王不至、帝乃旋師。

帝龍舟を御するに、会々暴風 漂蕩し、幾ど覆没に至る。帝 群臣に問ひて問く、「權 当に自ら来るべきや否や」と。咸曰く、「陛下 親征し、權 恐怖す。必ず国を挙げて応ぜん。又敢へて大衆を以て之を臣下に委ねず。必ず当に自ら来るべし」と。劉曄曰く、「彼謂ふ、陛下 万乗之重を以て己を牽かんと欲すれども、而るに江湖を超越するは別將に在り。必ず兵を勒して事を待て。未だ進退有らず」と。大駕 停住すること積日、吳王 至らず、帝乃ち師を旋す。

卷十二 〔鮑勳伝〕…黄初四年、尚書令陳羣、僕射司馬宣王並奉勳為宮正、宮正即御史中丞也。帝不得已 而用之、百寮敵憚、罔不肅然。六年秋、帝欲征吳、羣臣大議、勳面諫曰…「王師屢征而未有 所克者、蓋以吳、蜀唇齒相依、憑阻山水、有難拔之勢故也。往年龍舟飄蕩、隔在南岸、聖躬蹈危、臣下破膽。此時宗廟幾至傾覆、為百世之戒。今又勞兵襲遠、日費千金、中国虚耗、令黠虜玩威、臣竊以為不可。」帝益忿之、左遷勳為治書執法。卷十四 〔劉曄伝〕…五年幸廣陵泗口、命荊揚州諸軍並進。会羣臣、問「權当自来不。」咸曰「陛下親征、權恐怖、必举国而応。又不敢以大衆委之臣下、必自將而來」曄曰「彼謂、陛下欲以萬乘之重牽己而超越江湖者在於別將、必勒兵待事、未有進退也」大駕停住積日、權果不至。帝乃旋師、云「卿策之是也。当念為吾滅二賊。不可但知其情而已。」

是時、曹休表得降賊辞、孫權已在濡須口。中領軍衛臻曰…「權恃長江、未敢亢衡、此必畏怖偽辞耳。」考核降者、果守將所作也。

鮮卑の軻比能 步度根の兄の扶羅韓を誘ひて之を殺す。步度根 是に由り軻比能を怨み、更相攻撃す。步度根の部衆 稍々弱く、其の衆万余落を將ゐて太原・雁門に保す。是の歲、闕に詣りて貢獻す。而るに軻比能の衆 遂に強盛たり、東部の大人の素利に出撃す。護烏丸校尉の田豫 虚に乗じて其の後を掩り、軻比能 別帥の瑣奴をして豫を拒ましめ、豫之を撃破す。軻比能 是に由り攜貳し、数々辺寇を為す。幽・并之に苦しむ。

〔鮮卑伝〕…文帝踐阼、田豫為烏丸校尉、持節并護鮮卑、屯昌平。步度根遣使獻馬、帝拜為王。後数与軻比能更相攻撃、步度根部衆稍寡弱、將其衆萬餘落保太原、雁門郡。步度根乃使人招呼泄裊泥曰…汝父為比能所殺、不念報仇、反属怨家。今雖厚待汝、是欲殺汝計也。不如還我、我与汝是骨肉至親、豈与仇等。」由是裊泥將其部落逃歸 步度根、比能追之弗及。至黄初五年、步度根詣闕貢獻、厚加賞賜、是後一心守邊、不為寇害、而軻比能衆遂彊盛。〔鮮卑 軻比能伝〕…五年、比能復擊素利、豫帥輕騎徑進掩其後。比能使別小帥瑣奴拒豫、豫進討、破走之、由是懷貳。乃与輔国將軍鮮于輔書曰…「夷狄不識文字、故校尉闇柔保我於天子。我与素利為讐、往年攻撃之、而田校尉助素利。我臨陳使瑣奴往、問使君来、即便引軍退。步度根数数鈔盜、又殺我弟、而誣我以鈔盜。我夷狄雖不知礼義、兄弟子孫受天子印綬、牛馬尚知美水草、況我有人心邪。將軍当保明我於天子。」輔得書以聞、帝復使豫招納安慰。比能衆遂彊盛、控弦十餘萬騎。每鈔略得財物、均平分付、一決目前、終無所私、故得衆死力、餘部大人皆敬憚之、然猶未能及檀石槐也。

■黄初六年二月■  
春、二月、詔以陳群為鎮軍大將軍、隨車駕董督衆軍、錄行尚書事。司馬懿為撫軍大將軍、留許昌、督後臺文書。

春二月、詔して陳群を以て鎮軍大將軍と為し、車駕に隨ひて衆軍を董督し、録行尚書事せしむ。司馬懿を撫軍大將軍と為し、許昌に留め、後台の文書を督せしむ。

胡三省…魏、晋之制、大將軍不開府者、品秩第二、其祿与特進同、置長史、司馬、主簿、諸曹官屬。行尚書、謂尚書之隨駕者。後臺、謂尚書臺之留許昌者也。／召陵、漢屬汝南郡。『晋志』屬潁川郡。賢曰、召陵故城在今豫州鄆城縣東、通討虜渠以伐吳也。〔文帝紀〕…六年春二月、遣使者循行許昌以東、沛郡、問民所疾苦、貧者振貸之。〔文帝紀〕注引『魏略』…其以尚書令穎鄉侯陳羣為鎮軍大將軍、尚書僕射西鄉侯司馬懿為撫軍大將軍。若吾臨江授諸將方略、則撫軍當留許昌、督後諸軍、錄後臺文書事。鎮軍隨車駕、當董督衆軍、錄行尚書事。

■黄初六年三月■  
三月、帝行如召陵、通討虜渠。乙巳、還許昌。并州刺史梁習討軻比能、大破之。（文帝紀による）

漢諸葛亮率衆討雍闓等、參軍馬謖送之數十里。亮曰、雖共謀之歷年、今可更惠良規。謖曰、南中恃其險遠、不服久矣。雖今日破之、明日復反耳。今公方傾国北伐、以事強賊、彼知官勢内虚、其叛亦速。若殄尽遺類、以除後患、既非仁者之情、且又不可倉卒也。夫用兵之道、攻心為上、攻城為下、心戰為上、兵戰為下、願公服其心而已。亮納其言。

漢の諸葛亮 衆を率ゐて雍闓等を討つ。參軍の馬謖 之を送ること數十里。亮曰く、「共に之を謀ること歴年と雖も、今更めて良規を惠す可し」と。謖曰く、「南中 其の險遠なるを待み、服せざること久し。今日 之を破ると雖も、明日 復た反くのみ。今 公方に国を傾けて北伐して強賊を事とす。彼 官勢の内虚なるを知り、其の叛くこと亦た速やかなり。若し遺類を殄尽して以て後患を除けば、既に仁者の情に非ず。且つ又倉卒す可からず。夫れ用兵の道、心を攻むるを上と為し、城を攻むるを下と為す。心戦を上と為し、兵戦を下と為す。願はくは公 其の心を服せしむる而已」のみ」と。亮 其の言を納る。謖、

憑阻山水有難拔之勢故也。往年龍舟飄蕩隔在南岸、聖躬蹈危、臣下破膽。此時宗廟幾至傾覆、為百世之戒。今又勞兵襲遠、日費千金中国虚耗、令黠虜玩威。臣竊以為不可」帝益忿之、左遷勳、為治書執法。帝、從春還…。

■黄初六年五月■  
夏、五月、戊申、帝如譙。（文帝紀による）

■黄初六年六月■  
吳丞相北海孫劭卒。六月、以太常顧雍為丞相、平尚書事。

吳の丞相たる北海の孫劭 卒す。六月、太常の顧雍を以て丞相と為し、平尚書事せしむ。〔吳主伝〕…四年夏五月丞相孫劭、卒。六月以太常顧雍、為丞相。卷五十二 顧雍伝…改為太常、進封醴陵侯、代孫劭為丞相、平尚書事。

利成郡兵蔡方等反、殺太守徐質、推郡人唐咨為主、詔屯騎校尉任福等討平之。咨自海道亡入吳、吳人以為將軍。

利成郡の兵たる蔡方等 反し、太守の徐質を殺し、郡人の唐咨を推して主と為す。屯騎校尉の任福等に詔して之を討平せしむ。咨 海道自り吳に亡入す。吳人 以て將軍と為す。胡三省…利成縣、漢屬東海郡、魏武始分置利成郡。〔文帝紀〕…六月、利成郡兵蔡方等以郡反、殺太守徐質。遣屯騎校尉任福步兵校尉段昭与青州刺史討平之。其見脅略及亡命者、皆赦其罪。卷二十八 唐咨伝…黄初中、利成郡反、殺太守徐質、推咨為主。文帝遣諸軍討破之、咨走入海、遂亡至吳、官至左將軍、封侯、持節。

■黄初六年七月■  
秋、七月、立皇子鑿為東武陽王。（文帝紀による）

良の弟なり。

胡三省…漢俗謂天子為県官、亦謂為国家。官勢、猶言国勢也。卷三十九 馬謖伝注引『襄陽記〕…建興三年、亮征南中、謖送之數十里。亮曰…「雖共謀之歷年、今可更惠良規。」謖对曰…「南中恃其險遠、不服久矣、雖今日破之、明日復反耳。今公方傾国北伐以事疆賊。彼知官勢内虚、其叛亦速。若殄尽遺類以除後患、既非仁者之情、且又不可倉卒也。夫用兵之道、攻心為上、攻城為下、心戰為上、兵戰為下、願公服其心而已。」亮納其策、赦孟獲以服南方。故終亮之世、南方不敢復反。

辛未、帝以舟師復征吳、群臣大議、宮正鮑勳諫曰、王師屢征而未有所克者、蓋以吳、蜀唇齒相依、憑阻山水、有難拔之勢故也。往年龍舟飄蕩、隔在南岸、聖躬蹈危、臣下破膽、此時宗廟幾至傾覆、為百世之戒。今又勞兵襲遠、日費千金、中国虚耗、令黠虜玩威、臣竊以為不可。帝怒、左遷勳為治書執法。

辛未、帝 舟師を以て復た吳を征む。群臣 大議す。宮正の鮑勳 諫めて曰く、「王師 屢々征すれども未だ克つ所有らず。蓋し吳蜀の唇齒のごとく相ひ依るを以て、山水に憑阻し、難拔の勢有る故なり。往年 龍舟 飄蕩し、隔てて南岸に在り、聖躬 危を踏み、臣下 膽を破る。此の時 宗廟 幾ほとんど傾覆するに至り、百世の戒と為る。今 又 兵を勞し速きを襲ひ、日に千金を費し、中国 虚耗し、黠虜をして玩威せしむ。臣 竊かに以為へらく可からず」と。帝 怒り、勳を左遷して治書執法と為す。

胡三省…據『勳伝』、宮正、即御史中丞也。『兵法』曰、興師十萬、日費千金。胡三省…（黠虜玩威は）『国語』、祭公謀父曰、先王耀德不觀兵。夫兵戰而時動、動則威、觀則玩、玩則無震。維基文庫…辛未 是年三月戊寅朔、無辛未。疑為閏三月事、按閏三月戊申朔、為二十四日。〔文帝紀〕…辛未、帝為舟師東征。卷十二 鮑勳伝…六年秋、帝欲征吳。羣臣大議、勳面諫曰「王師屢征而未有所克者、蓋以吳蜀唇齒相依、

漢諸葛亮至南中、所在戰捷、亮由越嶲入、斬雍闓及高定。使庾隆督益州李恢由益州入、門下督巴西馬忠由牂柯入、擊破諸県、復与亮合。孟獲收闓餘衆以拒亮。七縱七擒而亮猶遣獲、獲止不去、曰…「公、天威也、南人不復反矣。」亮遂至滇池。益州、永昌、牂柯、越嶲四郡皆平、亮即其渠率而用之。亮於是悉收其俊傑孟獲等以為官屬、出其金、銀、丹、漆、耕牛、戰馬以給軍国之用。自是終亮之世、夷不復反。

漢の諸葛亮 南中に至り、戦捷在る所、亮 越嶲<sup>ト</sup>由り入り、雍闓及び高定を斬る。庾隆督たる益州の李恢をして益州由り入らしめ、門下督たる巴西の馬忠 牂柯由り入り、諸県を撃破し、復た亮と合はざる。孟獲 闓の余衆を収めて以て亮を拒む。七縱七擒して亮 猶ほ獲を遣る。獲 止まりて去らず、曰く、「公、天威なり。南人 復た反さず」と。亮 遂に滇池に至る。益州・永昌・牂柯・越嶲の四郡 皆 平らぐ。亮 其の渠率に即して之を用ゐる。亮 是に於て悉く其の俊傑たる孟獲等を収めて以て官屬と為し、其の金・銀・丹・漆・耕牛・戦馬を出さしめて以て軍国の用に給す。是自り亮の世を終はるまで、夷 復た反かず。

胡三省…裴松之曰、訊之蜀人云、庾隆、地名、去蜀三千餘里。時未有寧州、号為南中、立此職以綏撫之。晋泰始中、始分為寧州平夷県、属牂柯郡。余據『蜀志』、庾隆督住平夷、蓋僑治、非庾隆之本地也。至馬忠為庾隆督、乃自平夷移住建寧味県、後遂為寧州治所。／滇池、滇池、属益州郡。池周回二百餘里、水源深廣、而未更淺狹、有似倒流、故謂之滇池。／即、就也。渠、大也。渠率、大率也。率、与帥同。

〔諸葛亮伝〕…三年春、亮率衆南征、其秋悉平。軍資所出、国以富饒、乃治戎講武、以俟大举。〔諸葛亮伝〕注引『漢晋春秋〕…漢晋春秋曰。亮至南中、所在戰捷。聞孟獲者、為夷、漢所服、募生致之。既得、使觀於營陳之間、問曰「此軍何如。」獲对曰「向者不知虚美、故敗。今蒙賜觀看營陳、若祇如此、即定易勝耳。」亮笑、縱使更戰、七縱七擒、而亮猶遣獲。獲止不去、曰「公、天威也、南人不復反矣。」遂至滇池。南中平、

皆即其渠率而用之。或以諫亮、亮曰「若留外人、則当留兵、兵留則無所食、一不易也。加夷新傷破、父兄死喪、留外人而無兵者、必成禍患、二不易也。又夷素有廢殺之罪、自嫌尊重、若留外人、終不相信、三不易也。今吾欲使不留兵、不運糧、而網紀粗定、夷、漢粗安故耳。」

『雲南志略』…蜀建興三年、諸葛亮征南、聞孟獲為夷、漢所服、募生致之、凡七縱七擒。獲曰…「公、天威也。南人不復反矣。」諸部悉平。亮即其渠帥而用之。或以諫亮、亮曰…「若留外部人、則当留兵、留兵則糧加。以夷新傷破、父兄死喪、留外人而無兵、必成禍患。今吾欲不留兵、不運糧、紀綱粗定、夷漢粗安。」於是悉收豪傑以為官屬、出其金銀、丹漆、牛馬、以給軍国之用。終亮之世、夷不復反。

## ■黄初六年八月■

**八月、帝以舟師自譙循渦入淮。尚書蔣濟表言水道難通、帝不從。**

八月、帝舟師を以て譙自り渦を循りて淮に入る。尚書の蔣濟 表言すらく、水道 通じ難しと。帝 従はず。

胡三省…『水経』、陰溝水、出河南陽武界漢陂渠、東南至沛為渦水、渦水東逕譙郡、又東南至下邳淮陰界入於淮。杜佑曰、亳州治譙縣、有渦水。**文帝紀**…八月帝遂以舟師自譙循渦入淮、從陸道幸徐。卷十四 **蔣濟伝**…(曹) 仁薨、復以濟為東中郎將、代領其兵。詔曰「卿兼資文武、志節慷慨。常有超越江湖吞吳会之志。故復授將率之任」頃之、徵為尚書。車駕幸廣陵、濟表水道難通、又上『三州論』以諷帝、帝不從。於是戰船数千皆滯不得行……

## ■黄初六年十月■

**冬、十月、如廣陵故城、臨江觀兵、戎卒十餘萬、旌旗數百里、有渡江之志。吳人嚴兵固守。時大寒、冰、舟不得入江。帝見波濤洶湧、嘆曰…「嗟**

胡三省…據『蔣濟伝』、精湖在山陽。山陽在下邳淮陰界、今楚州山陽縣。／(土豚)は、『目錄』作「土陸」。『廣韻』作「土垠」、『註』雲、以草裹土築城及鎮水也。卷十四 **蔣濟伝**…於是戰船数千皆滯不得行。議者欲就留兵屯田。濟以為、東近湖北臨淮、若水盛時賊易為寇、不可安屯。帝從之、車駕即發。還到精湖、水稍尽。尽留船、付濟。船本歷適數百里中、濟更鑿地作四五道、賊船令聚。豫作土豚遏斷湖水、皆引後船、一時開遏入淮中。帝還洛陽……

## ■黄初六年十一月■

**十一月、東武陽王鑿薨。**(文帝紀による)

## ■黄初六年十二月■

**十二月、吳番陽賊彭綺攻沒郡縣、衆數萬人。**

十二月、吳の番陽賊の彭綺 郡縣を攻没し、衆は数万人なり。

**吳主伝**…冬十二月鄱陽賊彭綺、自称將軍、攻沒諸縣、衆數萬人。

## ■黄初七年正月■

**春、正月、壬子、帝還洛陽、謂蔣濟曰、事不可不曉。吾前決謂分半燒船於山陽湖中、卿於後致之、略与吾俱至譙。又每得所陳、実入吾意。自今討賊計畫、善思論之。**

春正月壬子、帝 洛陽に還る。蔣濟に謂ひて曰く、「事 曉らかにせざる可からず。吾前に決謂分半燒船於山陽湖中、卿 後にて之を致し、略ぼ吾と俱に譙に至る。又 毎に陳ぶる所を得て、実ニ吾が意に入る。自今 討賊の計畫、善く之を思論せよ」と。

胡三省…謂到精湖、水尽、船不得過、欲分半船也。宋白曰、楚州山陽縣本射陽縣地、晋義熙置山陽郡及山陽縣、以境内有地名山陽、因以為名。戴延之『西征記』、山陽、

乎、固天所以限南北也。」遂帰。孫韶遣將高寿等率敢死之士五百人、於徑路夜要帝、帝大驚。寿等獲副車、羽蓋以還。

冬十月、広陵の故城に如き、江に臨みて兵を觀る。戎卒は十余万、旌旗は數百里、渡江の志有り。吳人兵を嚴め固守す。時に大いに寒く、冰り、舟江に入るを得ず。帝 波濤の洶湧たるを見て、嘆じて曰く、「嗟乎、固に天南北を限る所以なり」と。遂に帰る。孫韶將の高寿等を遣り敢死の士五百人を率ゐしめ、徑路に於いて夜に帝を要し、帝大驚す。寿等 副車・羽蓋を獲て以て還る。

胡三省…廣陵故城謂之蕪城、今其處不可考。**文帝紀**…九月築東巡臺。冬十月行幸廣陵故城、臨江觀兵、戎卒十餘萬、旌旗數百里。是歲大寒、水道冰、舟不得入江乃引還。**吳主伝** 黄武四年 十二月条 注引『吳録』…是冬魏文帝至廣陵、臨江觀兵、兵有十餘萬、旌旗數數百里、有渡江之志。權嚴設固守。時大寒冰、舟不得入江。帝見波濤洶湧、歎曰…「嗟乎。固天所以隔南北也。」遂帰。孫韶又遣將高寿等率敢死之士五百人於徑路夜要之、帝大驚、寿等獲副車羽蓋以還。

於是戰船数千皆滯不得行、議者欲就留兵屯田、蔣濟以為、東近湖、北臨淮、若水盛時、賊易為寇、不可安屯。帝從之、車駕即發。還、到精湖、水稍尽、尽留船付濟。船連延在數百里中、濟更鑿地作四五道、賊船令聚。豫作土豚遏斷湖水、皆引後船、一時開遏入淮中、乃得還。

是に於て戰船の数千 皆滯りて行くことを得ず、議者 兵を就留して屯田せしめんと欲す。蔣濟以為へらく、「東は湖に近く、北は淮に臨む。若し水の盛時なれば、賊 寇を為し易し。屯を安ずる可からず」と。帝之に従ひ、車駕 即ち発す。還りて、精湖に到る。水稍々尽き、尽く船を留めて(蔣)濟に付す。船連延すること數百里中に在り、濟 更めて地を鑿ちて四五道を作し、船を蹴りて聚(あ)つめしむ。豫め土豚を作りて湖水を遏斷し、皆 後船を引く。一時 遏を開きて淮中に入り、乃ち還るを得たり。

津名。**文帝紀**…年春正月、將幸許昌、許昌城南門無故自崩、帝心惡之遂不入。壬子 行還洛陽宮。卷十四 **蔣濟伝**…帝還洛陽、謂濟曰「事不可不曉。吾前決謂分半燒船于山陽池中。卿於後致之、略与吾俱至譙。又每得所陳、実入吾意。自今討賊計畫、善思論之。」

**漢丞相亮欲出軍漢中、前將軍李嚴当知後事、移屯江州、留護軍陳到駐永安、而統屬於嚴。**

漢の丞相の亮 漢中に軍を出さんと欲す。前將軍の李嚴 当に後事を知るべく、移りて江州に屯す。留護軍の陳到 永安に駐まり、嚴を統屬す。

**後主伝**…五年春。丞相亮、出屯漢中、營沔北陽平石馬。

卷四十 **李嚴伝**…四年、転為前將軍。以諸葛亮欲出軍漢中、嚴当知後事、移屯江州。留護軍陳到、駐永安、皆統屬嚴。嚴、与孟達書曰「吾与孔明俱受寄託、憂深責重。思、得良伴」亮亦与達書曰「部分如流、趨捨罔滯。正方性也」其見貴重如此。

**吳陸遜以所在少穀、表令諸將增廣農畝。吳王報曰…「甚善。令孤父子親受田、車中八牛、以為四耦、雖未及古人、亦欲与衆均等其勞也。」**

吳の陸遜 所在に少穀なるを以て、表して諸將に農畝を増広せしむ。吳王 報いて曰く、「甚だ善し。孤なる父子をして親ら田・車中八牛を受けしめよ。以て四耦を為せば、未だ古人に及ばざると雖も、亦た衆と与に其の勞を均等にせんと欲す」と。

胡三省…未廣五寸為伐、二伐為耦。漢制、后稷始畊田、以二耜為耦。『註』雲、并兩耜而耕也。**吳主伝**…五年春、令曰「軍興日久、民離農畔、父子夫婦、不聽相卹、孤甚愍之。今、北虜縮竄、方外無事。其、下州郡有以寬息」是時、陸遜以所在少穀、表、令諸將增廣農畝。權報曰「甚善。今、孤父子親自受田、車中八牛以為四耦。雖未及古人、亦欲与衆均等其勞也」秋七月權聞、魏文帝崩、征江夏圍石陽、不克而還。

帝之為太子也、郭夫人弟有罪、魏郡西部都尉鮑勲治之。太子請、不能得、由是恨勲。及即位、勲數直諫、帝益忿之。帝伐吳還、屯陳留界。勲為治書執法、太守孫邕見出、過勲。時營壘未成、但立標埒、邕邪行、不從正道、軍營令史劉曜欲推之、勲以塹壘未成、解止不舉。帝聞之、詔曰、勲指鹿作馬、收付廷尉。廷尉法議、正刑五歲、三官駁、依律、罰金二斤、帝大怒曰、勲無活分、而汝等欲縱之。收三官已下付刺奸、当令十鼠同穴。鐘繇、華歆、陳群、辛毗、高柔、衛臻等並表勲父信有功於太祖、求請勲罪、帝不許。高柔固執不從詔命、帝怒甚、召柔詣臺、遣使者承指至廷尉誅勲。勲死、乃遣柔還寺。

帝の太子と為るや、郭夫人の弟罪有り。魏郡西部都尉の鮑勲、之を治む。太子請へども、得ること能はず、是に由り勲を恨む。即位するに及び、勲数々直諫し、帝益々之を忿る。帝吳を伐ちて還り、陳留の界に屯す。勲治書執法と為り、太守の孫邕見ひて出で、勲を過ぐ。時に營壘未だ成らず、但だ標埒を立つ。邕邪まに行き、正道に從はず。軍營令史の劉曜、之を推さんと欲す。勲塹壘の未だ成らざるを以て、解止して挙げず。帝之を聞き、詔して曰く、「勲鹿を指して馬と作す。收めて廷尉に付せ」と。廷尉法議し、「刑五歳を正せ」とす。三官駁し、「律に依れば、罰金二斤なり」と。帝大怒して曰く、「勲活分無し。而るに汝等、之を縦ままにせんと欲す。三官より已下を收め刺奸に付せ。当に十鼠をして穴を同じくせしめよ」と。鐘繇・華歆・陳群・辛毗・高柔・衛臻等、勲の父の信太祖に功あることを並びに表し、勲の罪を請はんと求む。帝許さず。高柔固執して詔命に從はず。帝怒ること甚しく、柔を召して台に詣らしめ、使者をして承指して廷尉に至らしめて勲を誅す。勲死し、乃ち柔をして寺に還らしむ。

胡三省…漢獻帝建安十八年、魏武分魏郡置東、西部都尉。後以東部都尉立陽平郡、西部都尉立廣平郡、謂之三魏、皆屬司州。／（「正刑五歲」は）法議、引法而議也。

之。遂以舍客犯法、下獄当死。羣臣並救、莫能得。卞太后謂郭后曰「令曹洪今日死、

吾明日敕帝廢后矣」於是泣涕屢請、乃得免官削爵土。**曹洪伝** 注引『魏略』…文帝收

洪、時曹真在左右、請之曰「今誅洪、洪必以真為譖也。」帝曰「我自治之、卿何豫也。」

会卞太后責怒帝、言「梁、沛之間、非子廉無有今日」。詔乃釋之。猶尚没入其財產、太后又以為言、後乃還之。…文帝在東宮、嘗從洪貸絹百匹、洪不称意。及洪犯法、

自分必死、既得原、喜、上書謝曰「臣少不由道、過在人倫、長竊非任、遂蒙含貸。性無檢度知足之分、而有豺狼無厭之質、老悞倍貪、觸突國網、罪迫三千、不在赦宥、当就辜誅、棄諸市朝、猶蒙天恩、骨肉更生。臣仰視天日、愧負靈神、俯惟愆闕、慚愧怖悸、不能雜經以自裁割、謹塗顏闕門、拜章陳情。」

## ■黄初七年五月■

初、郭后無子、帝使母養平原王叡。以叡母甄夫人被誅、故未建為嗣。叡事後甚謹、後亦愛之。帝与叡獵、見子母鹿、帝親射殺其母、命叡射其子。

叡泣曰…「陛下已殺其母、臣不忍復殺其子。帝即放弓矢、為之惻然。」

め、郭后子無く、帝母をして平原王の叡を養はしむ。叡の母たる甄夫人の誅せらるるを以て、故に未だ建てて嗣と為らず。叡后に事ふること甚だ謹たり、后亦た之を愛す。帝叡と獵し、子母の鹿を見て、帝親ら其の母を射殺し、叡に其の子を射よと命ず。叡泣して曰く、「陛下、已に其の母を殺す。臣復た其の子を殺すに忍びず」と。帝即ち弓矢を放り、之の為に惻然とす。

**明帝紀** 注引『魏略』…文帝以郭后無子、詔使子養帝。帝以母不以道終、意甚不平。

後不獲已、乃敬事郭后、且夕因長御問起居、郭后亦自以無子、遂加慈愛。文帝始以帝不悅、有意欲以他姬子京兆王為嗣、故久不拜太子。**明帝紀** 注引『魏末伝』…曰。

正、結正也。五歳刑、髡鉗為城旦舂。（依律、罰金二斤）は）三官、廷尉正、監、平也。（召柔詣臺）は）召詣尚書臺也。

卷十二**鮑勲伝**…帝、從寿春還、屯陳留郡界。太守孫邕、見出、過勲。時營壘未成但立標埒、邕邪行不從正道。軍營令史劉曜欲推之、勲以塹壘未成、解止不舉。大軍還洛陽。曜有罪、勲奏紕遺。而曜密表助私解邕事。詔曰「勲指鹿作馬。收付廷尉」廷

尉法議「正刑五歲」三官駁「依律、罰金二斤」帝大怒曰「勲無活分、而汝等敢縱之。

收三官已下付刺姦、当令十鼠同穴」太尉鍾繇、司徒華歆、鎮軍大將軍陳羣、侍中辛毗、尚書衛臻、守廷尉高柔等、並表「勲父信有功於太祖」求請勲罪。帝不許、遂誅勲。勲、内行既脩、廉而能施。死之日、家無餘財。後二旬文帝亦崩、莫不為勲歎恨。

卷二十四**高柔伝**…帝、以宿嫌欲枉法誅治書執法鮑勲、而柔固執不從詔命。帝怒甚、遂召柔詣臺、遣使者承指至廷尉考竟勲。勲死乃遣柔還寺。

驃騎將軍都陽侯曹洪、家富而性吝嗇、帝在東宮、嘗從洪貸絹百匹、不称意、恨之。遂以捨客犯法、下獄当死、群臣並救、莫能得。卞太后責怒帝曰…「梁・沛之間、非子廉無有今日。又謂郭后曰、令曹洪今日死、吾明日敕帝廢後矣。於是郭后泣涕屢請、乃得免官、削爵土。

驃騎將軍たる都陽侯の曹洪、家は富みて性は吝嗇なり。帝東宮に在り、嘗て洪より絹百匹を貸る。意を称へず、之を恨む。遂に客を捨て法を犯すを以て、下獄して当に死すべしとす。群臣並びに救へども、能く得ること莫し。卞太后帝を責怒して曰く、「梁・沛の間、子廉非ずんば今日有ること無し」と。又郭後に謂ひて曰く、「曹洪をして今日死せしめば、吾明日帝に敕して后を廢せしむ」と。是に於て郭后泣涕して屢々請ひ、乃ち官を免かれ爵土を削るを得たり。

卷九**曹洪伝**…文帝即位、為衛將軍、遷驃騎將軍、進封野王侯、益邑千戸、并前二百一十戸、位特進。後、徙封都陽侯。始、洪家富而性吝嗇。文帝少時假求不称、常恨

帝嘗從文帝獵、見子母鹿。文帝射殺鹿母、使帝射鹿子、帝不從、曰「陛下已殺其母、

臣不忍復殺其子。」因涕泣。文帝即放弓箭、以此深奇之、而樹立之意定。

夏、五月、帝疾篤、乃立叡為太子。丙辰、召中軍大將軍曹真、鎮軍大將軍陳群、撫軍大將軍司馬懿、並受遺詔輔政。丁巳、帝殂。

胡三省…沈約『志』曰、中軍將軍、漢武帝以公孫敖為之、時為雜号。鎮軍、撫軍、

皆始於此。中、鎮、撫三号、比四鎮。『晋志』、諸大將軍開府位從公者、為武官公、皆著武冠、平上黑幘。／『通鑑』書法、天子奄有四海者書「崩」、分治者書「殂」。

惟東晋諸帝、以先嘗混一、書「崩」。『說文』曰、殂、往死也。**文帝紀**…夏五月丙辰、

帝疾篤、召中軍大將軍曹真鎮軍大將軍陳羣征東大將軍曹休撫軍大將軍司馬宣王、並受遺詔輔嗣主。遣後宮淑媛昭儀已下歸其家。丁巳、帝崩于嘉福殿。時年四十。

太子即皇帝位、尊皇太后曰太皇太后、皇后曰皇太后。癸未、追諡甄夫人曰文昭皇后。壬辰、立皇弟薤為陽平王。

維基文庫…癸未 是年五月辛丑朔、無癸未、疑為六月事。六月庚午朔、為十四日。壬辰 是年五月辛丑朔、無壬辰、疑為六月事。六月庚午朔、為二十三日。

**明帝紀**…丁巳即皇帝位、大赦。尊皇太后曰太皇太后、皇后曰皇太后。諸臣封爵各有差。癸未、追諡母甄夫人曰文昭皇后。壬辰、立皇弟薤為陽平王。

## ■黄初七年六月■

六月、戊寅、葬文帝於首陽陵。（文帝紀による）

胡三省…葬於洛陽東北首陽山、因以名陵。

（完）